

神奈川県海老名市

逆川跡、国分宿遺跡
(相模国分寺関連遺跡 第12次調査)
発掘調査報告書

2020
海老名市教育委員会

例 言

1. 本書は、神奈川県海老名市国分南一丁目1865番ほかに所在する逆川跡・国分宿遺跡（国分寺関連遺跡第12次調査）

（海老名市No37、No53）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、共同住宅の建設に伴う事前の記録保存調査として、海老名市教育委員会が実施した。

3. 発掘作業から報告書刊行までの期間及び出土品等整理作業場所は次のとおりである。

発掘作業期間 平成7年11月7日～平成7年12月29日

出土品等整理作業期間 平成8年2月5日～平成8年3月28日、平成30年4月1日～平成31年3月8日

報告書刊行期間 平成31年4月1日～令和2年3月27日

出土品等整理作業場所 海老名市教育委員会事務室（神奈川県海老名市中新田377）

株式会社アーク・フィールドワークシステム（神奈川県横浜市二俣川1-2-1-205）

4. 発掘作業は須田誠（海老名市遺跡調査会事務局・海老名市教育委員会）が担当した。

5. 整理作業のうち、遺物洗浄、注記は平成7年度に海老名市遺跡調査会が実施、出土品の整理及び実測、遺物写真撮影は平成30年度に海老名市との契約により株式会社アーク・フィールドワークシステム（担当：吉岡秀範）に委託し、図面整理、デジタルトレースは市川由希子（海老名市教育委員会教育総務課）が行った。

6. 発掘調査及び整理調査に際し、次の諸氏、諸機関よりご協力、ご教示賜った。（順不同、敬称略）

中山茂、中山勝夫、加藤千恵子、斎藤春江、加藤幸恵、上本進二、田尾誠敏、押木弘巳、岡本孝之、大村浩司、中三川昇、依田亮一、高橋香、有限会社拓成産業、神奈川県教育委員会文化遺産課、相模の古代を考える会

7. 本書の執筆は、今野まりこ、押方みはる（海老名市教育委員会教育総務課）、吉岡が以下のとおり分担し、全体の編集は押方と今野が行った。この他火山灰分析を上本進二氏（神奈川県災害考古学研究所）に委託し、その結果を第4章に収録した。

今野 第1章、第2章第1節・2節1、第3章第1・2節

押方 第2章第2節2、第5章

吉岡、今野、押方 第3章第3節

8. 現地調査の写真撮影は、須田が行い、遺物の写真撮影は吉岡が行った。

9. 本発掘調査に係る出土品及び図面、写真等の記録類は一括して海老名市教育委員会で保管している。

10. 本発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「国闘12」とした。

11. 遺物観察表中の出土位置は、現場での取り上げ時に用いた出土位置情報であり、Noは報告書の図番号とは異なる。

12. 本書の遺構・遺物の挿図中の指示は次のとおりである。

・遺構実測図の標高は海拔高度（東京湾平均海面：TP）を示す。

・挿図の縮尺は各図に示す。

・遺構挿図中の破線は推定復元線を示し、遺物挿図中の破線は指頭圧痕範囲、一点破線は施釉範囲を示す。

・遺構・遺物挿図中の網掛け等は下記のとおりである。

遺構		地山・断面		逆川関連遺構範囲		搅乱		覆土（未調査範囲）
遺物		須恵器断面・煤		土器		瓦		
				施釉				

・土層観察の色調は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄1995後期版）を、遺物観察の色調は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修2001年版）を参照した。

目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第3節 調査等体制	2
第2章 遺跡概観	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	6
1. 周辺の遺跡	6
2. 相模国分寺関連遺跡調査歴	11
第3章 調査の方法と成果	15
第1節 調査の方法	15
第2節 基本層序	15
第3節 発見された遺構と遺物	19
1. 奈良～平安時代	19
(1) A区	19
1) 逆川関連遺構	19
2) ピット群	24
(2) B区	25
1) 竪穴建物跡	25
2) 土坑	45
3) ピット群	46
第4章 自然科学分析	48
海老名市 逆川跡、国分宿遺跡A区第1トレンチのテフラ分析	48
第5章まとめ	50
引用参考文献	53

挿図目次

第1図 調査地点位置図	4	第9図 逆川関連遺構第1トレンチ平面図、断面図	20
第2図 周辺地形分類図及び本遺跡位置図	5	第10図 逆川関連遺構平面図・断面図	21
第3図 調査位置と周辺の遺跡	10	第11図 逆川関連遺構出土遺物	22
第4図 相模国分寺関連遺跡調査地点	14	第12図 逆川関連遺構西側階段状部分と周辺ピット群	23
第5図 基本層序	15	第13図 逆川関連遺構遺物分布図	23
第6図 A・B区全体図	16	第14図 B区遺構全体図	26
第7図 A区遺構全体図(1)	17		
第8図 A区遺構全体図(2)	18		

第15図	1号竪穴建物跡平面図・断面図	28	第25図	2号竪穴建物跡カマド平面図・断面図	38
第16図	1号竪穴建物跡カマド平面図・断面図	29	第26図	2号竪穴建物跡出土遺物(1)	39
第17図	1号竪穴建物跡出土遺物(1)	30	第27図	2号竪穴建物跡出土遺物(2)	40
第18図	1号竪穴建物跡出土遺物(2)	31	第28図	2号竪穴建物跡出土遺物(3)	41
第19図	1号竪穴建物跡出土遺物(3)	32	第29図	3号竪穴建物跡平面図・断面図	43
第20図	1号竪穴建物跡出土遺物(4)	33	第30図	3号竪穴建物跡出土遺物	44
第21図	1号竪穴建物跡出土遺物(5)	34	第31図	1~5号土坑平面図・断面図	47
第22図	1号竪穴建物跡出土遺物(6)	35	第32図	テフラ採取箇所	48
第23図	1号竪穴建物跡出土遺物(7)	36	第33図	テフラの顕微鏡等写真	49
第24図	2号竪穴建物跡平面図・断面図	38	第34図	逆川関連遺構(道状遺構)想定図	52

表 目 次

第1表	発掘調査に係る調整及び届出等の文書	2	第6表	1号竪穴建物跡出土遺物観察表	36
第2表	周辺の遺跡一覧	11	第7表	2号竪穴建物跡出土遺物観察表	41
第3表	相模国分寺関連遺跡・逆川跡調査歴 一覧	13	第8表	3号竪穴建物跡出土遺物観察表	44
第4表	逆川関連遺構出土遺物観察表	24	第9表	B区ピット計測表	46
第5表	A区ピット計測表	25	第10表	テフラ分析結果	48

写真図版 目次

写真図版表紙	A区全景(北から)	写真図版7	1. 1号竪穴建物跡カマド(南から) 2. 1号竪穴建物跡掘り方(南から)
写真図版1	1. 逆川跡流路図	写真図版8	1. 2号竪穴建物跡遺物出土状況 (東から)
写真図版2	1. A区全景(北東から) 2. A区全景(東から)	写真図版9	2. 2号竪穴建物跡掘り方(東から)
写真図版3	1. 逆川関連遺構(北から) 2. 逆川関連遺構第1トレンチ南側 土層堆積状況	写真図版10	1. 3号竪穴建物跡(北から) 2. 1~3号土坑(西から) 3. 4号土坑(北東から)
写真図版4	1. 逆川関連遺構遺物出土状況 (北西から) 2. 逆川関連遺構遺物出土状況 (北東から) 3. 逆川関連遺構(北東から)	写真図版11	1. 逆川関連遺構出土遺物
写真図版5	1. 逆川関連遺構西側段階状部分・ ピット群(南東から) 2. 逆川関連遺構西側段階状部分・ ピット群(南西から)	写真図版12	1. 1号竪穴建物跡出土遺物(1)
写真図版6	1. B区全景(西から) 2. 1号竪穴建物跡遺物出土状況 (南から)	写真図版13	1. 1号竪穴建物跡出土遺物(3) 2. 2号竪穴建物跡出土遺物(1)
		写真図版14	1. 2号竪穴建物跡出土遺物(2) 2. 3号竪穴建物跡出土遺物

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

相模国分寺関連遺跡第12次調査（海老名市国分南一丁目1865番ほか）は2棟の共同住宅建設に伴うものである。

海老名市国分南一丁目1865番ほかにおける開発事前協議書が平成7（1995）年9月22日付で、事業者から海老名市長宛に出されたことにより、海老名市教育委員会（以下、「市教育委員会」という。）との協議が開始し、事業者から10月3日付けで市教育委員会教育長宛に「発掘届などに関する誓約書」が提出された。

共同住宅建設地が逆川跡（海老名市No.37埋蔵文化財包蔵地）に該当していることから、事業者は、10月6日付で、市教育委員会生涯学習課に神奈川県教育委員会（以下、「県教育委員会」という。）教育長宛の文化財保護法（以下、「保護法」という。）第57条2（土木工事等の届出）に基づく埋蔵文化財発掘の届出を提出了。事業地は相模国分寺跡の主要伽藍地の北側に所在し、逆川船着場跡の想定地点付近であり、周辺においても相模国分寺関連遺跡として11次にわたる調査が実施されていた。以上のことから、県教育委員会教育長より、事業者が発掘調査を実施するよう10月23日付けで通知がされた。

この通知を受けて、海老名市遺跡調査会（会長亀井英一）は、事業者と協議を行い、保護法第57条1に基づき発掘調査の届出を行い、11月7日～9日に試掘調査を実施した。試掘調査は、範囲確認のため、開発予定地内にトレーナーを2本（100m）設定して実施したところ、逆川の関連遺構等、埋蔵文化財が密に確認された。

試掘調査の結果を基に事業者と協議を行い、埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

事業者と委託契約を締結した海老名市遺跡調査会が、「相模国分寺関連遺跡第12次調査」として11月20日から本発掘調査を開始した。

調査は、建物の範囲を調査対象範囲とし、北側のA区288m²、南側のB区237m²、合計525m²を設定した。調査の深度としては、建物の基礎工事が及ぶ深さ約2mまでとし、逆川跡の遺構が存在するものの基礎が及ばない部分については、トレーナーを設定した上で一部のみを調査し、その他の部分については、現状保存を行った。

発掘調査期間は、11月20日から12月29日までの33日間で実施した。併せて測量委託を行い、調査区基準点を設置した。

第12次調査では、奈良・平安時代の竪穴建物跡等、逆川跡以外の遺構も確認されたことから、相模国分寺関連遺跡（海老名市No.53埋蔵文化財包蔵地）の範囲を拡大し、遺跡分布地図の変更増補手続きを行った。

現地での発掘調査終了後、平成8年2月～3月に遺物洗浄及び注記作業を行った。その後、

平成30年度に市教育委員会にて遺構図面の作成を行い、出土品整理、遺物図面作成等の整理作業を委託し、平成31年度に発掘調査報告書作成業務を行った。

なお、相模国分寺関連遺跡という名称は、海老名市埋蔵文化財包蔵地 No. 1、No.37、No.53の範囲内で行う調査の総称として使用していたが、調査次数を重ねていく中で、相模国分寺建立以前の時代の埋蔵文化財も多く確認されていることや、複数の埋蔵文化財包蔵地を同一の名称で呼称することによる混乱を避けるため、平成19年1月に海老名市No.53埋蔵文化財包蔵地について「相模国分寺関連遺跡」から「国分宿遺跡」と遺跡名称の変更を行った。

第1表 発掘調査に係る調整及び届出等の文書

文書種類・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
1 文化財保護法第57条21に基づく土木工事等の届出					
土木工事等の届出		平成7年10月6日	事業主	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会を経由
土木工事等の届出に対する通知	文部6-377号	平成7年10月23日	神奈川県教育委員会教育長	事業主	海老名市教育委員会を経由
2 文化財保護法第57条11に基づく発掘調査の届出					
発掘調査の届出		平成7年10月23日	海老名市遺跡調査会会長	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会を経由
発掘調査の届出に対する指示通知	文部5-200号	平成7年11月2日	神奈川県教育委員会教育長	海老名市遺跡調査会会長	海老名市教育委員会を経由
3 出土品の手配					
埋藏品発見届		平成32年2月18日	海老名市遺跡調査会会長	海老名市警察署長	
出土文化財保管証の提出		平成32年2月18日	海老名市遺跡調査会会長	神奈川県教育委員会教育長	
埋藏物の文化財認定と短納について	文造第51027号	平成32年3月4日	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会教育長	
出土文化財の譲りについて（申出）	文造第2546号	令和元年12月6日	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会教育長	
出土文化財の譲りについて（回答）	海教總収第4140号	令和元年12月19日	海老名市教育委員会教育長	神奈川県教育委員会教育長	
出土文化財の譲りについて（通知）	文造第22738号	令和2年1月17日	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会教育長	

第3節 調査等体制

発掘調査（平成7年度）※所属・肩書は平成7年度のもの

調査組織 海老名市遺跡調査会

会長 亀井英一（市教育委員会教育長）、副会長 池田正一郎（市文化財保護委員代表）、理事 竹内吉宣（市助役）、理事 吉田章一郎（学識経験者）、理事 矢野眞（市議会議員）、理事 小山内国男（市議会議員）、理事 鈴木節男（市生涯学習部長）

事務局 市教育委員会生涯学習部生涯学習課

局長 木村和雄、局次長 斎藤幸一、局員 横山丘明、山田敏明、須田 誠（担当）、告原幸治、服部みはる

出土品整理・報告書作成（平成30・31年度）

海老名市教育委員会教育長 伊藤文康、教育部長 岡田尚子（平成30年度）、教育部長 伊藤修（平成31年度）、教育部次長 楠指太一郎（平成30年度）、教育部次長 小宮洋子（平成30年度）、教育部次長 伊藤修（平成30年度）、教育部次長 萩原明美（平成31年度）、教育部参事兼教育総務課長 中込紀美子、文化財係長 押方みはる、主査・副主幹 今野まりこ（担当）、主査 向原崇英、臨時職員 市川由希子、和田山千曉

（㈱アーケ・フィールドワークシステム（整理作業委託）

第2章 遺跡概観

第1節 地理的環境（第1、2図 写真図版1）

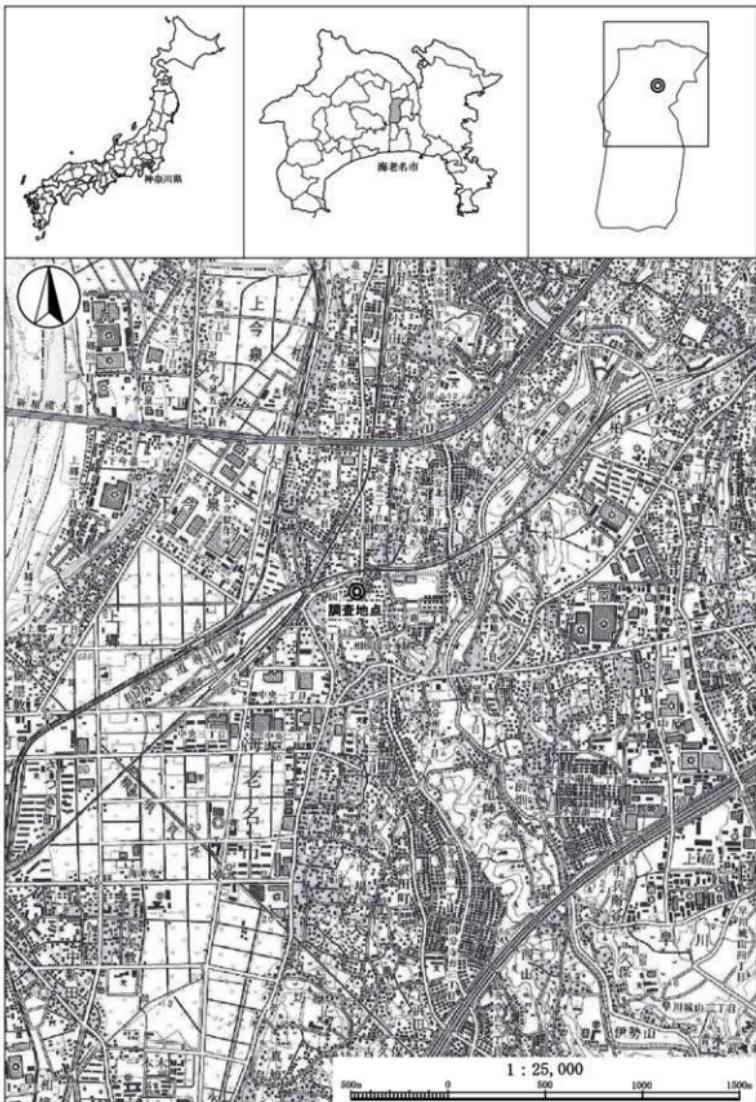
相模国分寺関連遺跡第12次調査地点（逆川跡：海老名市№37、国分宿遺跡：海老名市№53）は、神奈川県海老名市国分南一丁目1865番ほかに位置し、小田急線、相鉄線海老名駅東方約700mに所在している。

海老名市は神奈川県のはば中央部に位置し、相模川中流域の左岸に沿って南北約8km、東西3.2～6kmと南北に細長く展開しており、西側は相模川を挟んで厚木市、南側は藤沢市・寒川町、東側は綾瀬市、北側は座間市と接している。地形的には、市域の西側は相模川に沿うように沖積低地（標高14～24m）が広がり、その東側には段丘面を形成する相模野台地中津原面（標高30～40m）、その上位である座間丘陵を経て、相模野台地相模原面が続いている。

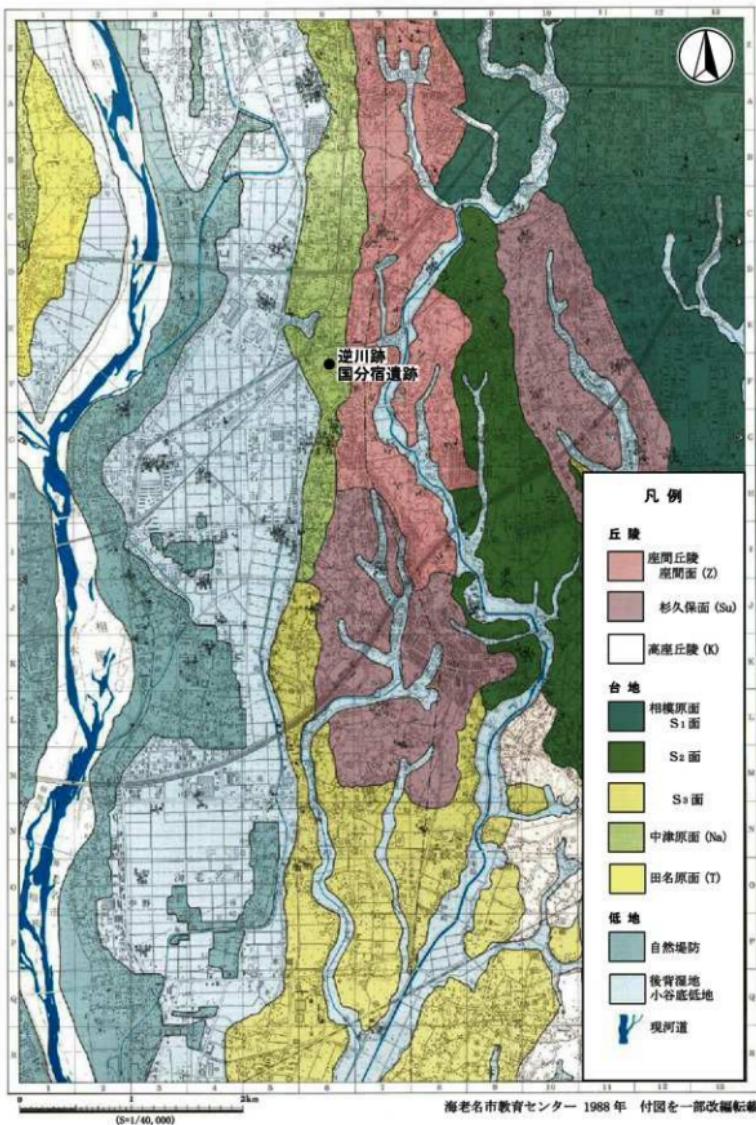
市域北東部は目久尻川が南流し、一部は綾瀬市との行政界となっている。丘陵及び台地は目久尻川とその支流により開析され、複数の支谷が形成されている。本調査地点は相模野台地中津原面にあたり、発掘調査前の海拔標高は約32mである。同じ台地上には相模国分寺跡、相模国分尼寺跡が所在し、直線距離で南に70mほどで相模国分寺跡の史跡指定地北端となり、塔跡基壇までも200mほどという立地である。

逆川は、目久尻川から分水し、座間丘陵沿いに南西方向の流路をとった後、大山街道付近で北西方向へとU字状に向きを変え、古代は相模国分尼寺跡の西側の谷へと向かうものであったとみられている。後に今回の調査地点より70mほど北で、西側に流路が曲げられ（新堀）、昭和15年に相模川左岸用水が整備される頃までは用水路として利用されていた。これらの流路は戦後ほとんど埋め立てられたが、昭和21年の航空写真ではその痕跡が明瞭に見て取れる。

調査地点東側の市道1111号線も逆川の流路であり、平成になって暗渠化されたが、調査地点から北側は道路部分が周囲よりも特に低くなってしまっており、人工的に開削された堀の痕跡を留めている。調査地点周辺は「舟着場」と呼ばれ、逆川に関する遺構が想定されてきた場所である。



第1図 調査地点位置図 [S=1/25,000]



第2図 周辺地形分類図及び本遺跡位置図 [S=1/40,000]

第2節 歴史的環境

1. 周辺の遺跡（第3図、第2表）

海老名市域には旧石器時代から近世に至るまで各時代の遺跡が台地、丘陵、相模川河岸の自然堤防上を中心に多く所在している。本調査では、相模国分寺の造営に関連するとみられる古代の運河、逆川跡に関連する遺構及び平安時代の堅穴建物跡等が確認された。当該地点は前述のとおり相模野台地中津原面にあり、相模国分寺跡及び相模国分尼寺跡とは至近距離にある。この南北に細長く広がる台地上には7世紀代から10世紀後半頃までの集落が多く分布しており、古代高座郡の拠点的な地域であったとみられる。

ここでは本遺跡と同時期にあたる古代を中心とした周辺遺跡の様相について概観する。

相模国分寺跡（No.1）

相模野台地西端の段丘面である中津原面の端に所在する国指定史跡である。古くは江戸時代に編纂された『新編相模國風土記稿』に記載され、これまでに11次にわたる発掘調査が行われている。本跡は西に塔、東に金堂、北に講堂、南に中門を配し、中門から講堂を回廊又は築地で囲む配置となっている。講堂の北側には僧房があり、他に発掘調査で鐘楼跡、経蔵跡、掘立柱建物跡、さらにその北東にも大型の建物跡が確認されている。創建期の瓦は、主に横須賀市乗越瓦窯からの供給、その後の瓦は瓦尾根瓦窯等の瓦が主体となる状況が判明している。確認された区画溝から、寺域はおよそ東西240m、南北300mの範囲であったと考えられている。

相模国分尼寺跡（No.2）

これまでの調査で、金堂・講堂・鐘楼・経蔵・回廊等の遺構が確認されている。確認された区画溝や周辺の地形から伽藍地は175～200m四方と推測される。出土する瓦は東京都町田市の瓦尾根瓦窯のものが主体である。

本郷遺跡（No.3）、本郷中谷津遺跡（No.4）

相模川と釜坂川に挟まれた相模野台地の南端に近い平坦な台地上に位置する。本郷中谷津遺跡と本郷遺跡は、南北に連なっており、近接している。いずれも奈良～平安時代の大規模な集落が確認されており、墨書き土器、灰釉陶器、綠釉陶器、風字硯、瓦塔、帶金具、海老鋸等の鉄製品など特殊な遺物が出土しており、富裕層や在地化した地方官人等の居住も想定され、高座郡の有力氏族であった壬生氏との関連があるものとみられている。本郷遺跡のKE地区で三面庇を持つ梁行2間、桁行3間の建物（11号掘立柱建物）が確認され、壬生氏の居宅跡と想定されるとともに、「寺」などの墨書き及び刻書き土器、瓦塔片などの出土から村落内寺院が存在した可能性も指摘されている。

杉久保宮ノ前遺跡（No.33）

釜坂川左岸の低位な台地上に所在し、10世紀代の竪穴建物跡1棟と中世の所産とみられる井戸が確認されている。竪穴建物跡のカマド材には八王子市御殿山窯の瓦が使用されている。

望地遺跡（No.34）

目久尻川を挟んだ対岸の丘陵斜面上に所在し、これまでの発掘調査で8世紀前半に営まれた竪穴住居跡が確認されている。第6、9、12、13、14次調査では、道路状遺構が重複して3条以上確認されており、側溝、波板状の凹凸の掘り方があるものも確認されている。『延喜式』の東海道駅路と推定されている。

国分尼寺北方遺跡（No.35）

相模国分尼寺跡の北方に広がる地域では、多くの奈良～平安時代の遺構・遺物が確認されている。第7次調査では、庇付掘立柱建物跡と溝状遺構が確認され、柱穴からは「法華寺」と墨書きされた土師器が確認されたことから相模国分尼寺跡の寺域内であることが濃厚となり、溝状遺構は区画溝と考えられている。また、奈良～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡とともに墨書き土器が出土しており、尼寺跡と関連性が深い遺跡と考えられている。

第13・18次調査では、県道杉久保座間線に沿うように南北方向に延びる道路状遺構が確認されている。第13次調査の道路状遺構は、4～7mの幅員で側溝があり作り替えも行われており、出土遺物から古代～中世までのものとされている。第18次調査の硬化面は7面に及んでいる。

上の台遺跡（No.44）

本跡南側の座間丘陵上に所在したが、現在では道路の開削及び宅地造成により完全に消滅している。正式な発掘調査はされておらず詳細は不明であるが、「相模国分寺志」（文献107）によると、礎石建の建物があったことが報告されている。1963年の県立厚木高校歴史研究部の調査では、この遺構から西へ36m程離れたところには瓦溜りが確認されており、その調査内容から瓦尾根瓦窯及び南多摩瓦窯と少量の三浦半島系のものが入ることが確認されている。古くからこの一帯は現在の国分寺を含め「薬師堂」と呼ばれており、国分寺に関連した何らかの遺跡（寺院）があったことを物語っている。

上浜田遺跡（No.45）

本遺跡の南東で、尾根を越えた丘陵部と谷戸部に広がる奈良～平安時代の集落跡で、5期の集落変遷が考えられている。中でもⅢ・Ⅳ期に見られる集落の在り方は、相模国分寺跡造営期におけるムラの組織と構成の変化を読み取る上で重要であり、位置関係から国分寺造営との関係も考えられている。また、「延喜式」段階の古代東海道の浜田駅の位置については諸説あるが、海老名市大谷に上浜田、下浜田の小字名が残り、厚木街道が浜田に通じることから、この上浜田遺跡周辺に求める見方もある。

河原口坊中遺跡（No52）

相模川と中津川・小鮎川の3河川と鳩川が合流する付近の左岸の自然堤防上に位置する。7次に亘る調査で、弥生時代から近代に至る多くの遺構・遺物が発見されている。このうち奈良、平安時代は遺跡北側に集落が営まれ、8世紀から12世紀にかけての竪穴建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡などが確認されている。11～12世紀の竪穴建物跡と周辺では金床石や繩などが出土しており、鍛冶工房の存在も示唆されている。

国分南原西遺跡（No54）

本跡の南側に所在する遺跡で、平安時代の竪穴住居跡や土坑、溝状遺構等が確認されている。竪穴住居跡内からは、瓦がカマド構築材として、また床面や覆土から多く出土していることが注目される。

大谷真鯨遺跡（No60）

丘陵尾根から谷戸部にかけて展開する集落跡で、遺跡としては大谷向原遺跡とは別遺跡となっているが、同一集落であったと思われる。谷戸部には大型の井戸が2基設けられており、井戸から延びる溝状遺構から「大宅」と墨書きされた土師器壙が出土している。

大谷下浜田遺跡（No69）

座間丘陵上に所在し、上浜田遺跡の南側に広がる遺跡で、奈良時代～中世の建物跡等の遺構が確認されている。第14・15次調査では座間丘陵頂部を東西に横断している平安時代の道路状遺構が確認されている。

社家宇治山遺跡（No76）

相模川東岸の自然堤防上に所在しており、8～9世紀にかけての竪穴住居群や溝状遺構が確認されているほか、8～10世紀の南北に延びる道路状遺構が認められており、延喜式の駅路のほぼ延長線上にあることから、伝路の可能性が指摘されている。

大谷向原遺跡（No77）

大谷下浜田遺跡の南側に所在し、古墳時代後期～平安時代の大規模な集落跡が確認されており、5期の変遷が考えられている。「高坐官」の墨書き土器や風字硯、刀子、海老鉢等の出土や総柱式掘立柱建物跡の存在は、高座郡の有力氏族壬生氏との関連が考えられている。

大谷市場遺跡（No80）

上浜田遺跡の西側にあり、丘陵斜面から台地上に広がる集落跡で、区画整理事業に先立つ発掘調査では古墳時代後期～平安時代にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認されている。竪穴住居跡や掘立柱建物跡は7世紀～8世紀前半を主体とし、桁行4間以上の大形建物も複数確認されているほか、総柱建物跡も確認されている。

杉久保釜坂遺跡（No89）

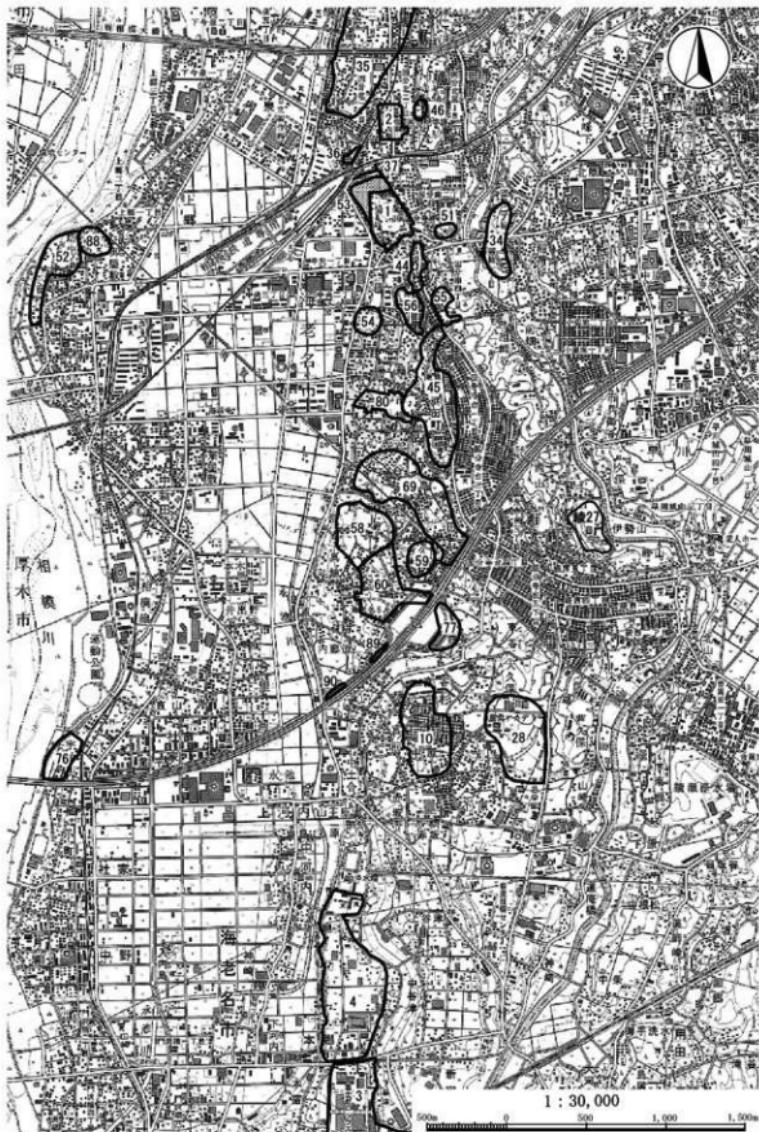
座間丘陵の縁辺部に位置しており、9～10世紀にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が確認され、「千内」・「千」などの墨書き土器が出土している。

杉久保内藤原遺跡（No90）

相模野台地南西縁部に位置し、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が確認されており、概ね9世紀後半頃の所産と考えられている。

宮久保遺跡（綾瀬市No27）

目久尻川沿いの右岸にある綾瀬市宮久保遺跡は、台地裾部から低地にかけて立地し、100軒を超す竪穴住居跡や掘立柱建物跡のほか、井戸や河道等が確認されている。井戸からは「鎌倉郷鎌倉里……(略)…天平五年九月」と書かれた木簡が出土し、郡里制の存在を裏付ける重要資料が出土している。また、「高坐」、「官」、「田令」、「鎌倉別」と記された墨書き土器も出土している。



第3図 調査位置と周辺の遺跡 [S=1/30,000]

第2表 周辺の遺跡一覧

海老名市

遺跡No.	遺跡名	所在地	種別	主要時期
1	相模国分寺跡、国分宿遺跡	国分南一・二丁目	集落跡・社寺跡	縄文・古墳～近世
2	相模国分尼寺跡	国分北二丁目	社寺跡	奈良・平安
3	本郷遺跡	本郷	集落跡	旧石器～近世
4	本郷中谷津遺跡	本郷	集落跡	縄文～近世
10	杉久保遺跡	杉久保北、杉久保南	集落跡	縄文～近世
33	杉久保宮ノ前道路	杉久保北	集落跡・散布地	古墳～中世
34	望地遺跡	望地	集落跡	縄文・奈良～中世
35	国分尼寺北方遺跡	国分北、上今泉	集落跡	縄文～近世
36	内出遺跡	国分北一丁目	集落跡・散布地	古墳・平安・近世
37	逆川跡	国分南一・二丁目	その他の遺跡（運河・用水路跡）	奈良～近世
44	上の台遺跡	国分南	散布地	奈良・平安
45	上浜田遺跡・上浜田古墳群	国分南、勝瀬、大谷北、浜田町	集落跡・散布地・古墳群	縄文～近世
46	大松原遺跡	国分北	散布地	平安
51	海老名市No51遺跡	国分南二丁目	散布地	縄文・平安
52	河原口坊中遺跡	河原口	集落跡・散布地	縄文～近代
53	国分宿遺跡	国分南一丁目	集落跡・散布地	古墳～平安
54	国分南原西遺跡	国分南三丁目	散布地	縄文・奈良・平安
55	宮台遺跡	国分南四丁目	散布地	縄文・近世
58	大谷坊原遺跡	大谷南二丁目	集落跡・散布地	縄文・古墳・平安・近世
59	大谷吉久保遺跡	大谷南三丁目	集落跡・散布地	奈良・平安
60	大谷真鶴遺跡	大谷南	集落跡・散布地	縄文・奈良～近世
69	大谷下浜田遺跡	大谷北、大谷南	集落跡・散布地	縄文・古墳～近世
76	社家宇治山遺跡	社家	集落跡・その他の墓	弥生・古墳・平安～近世
77	大谷向原遺跡	大谷南、杉久保北	集落跡・散布地	縄文～中世
80	大谷市場遺跡	大谷北二丁目	集落跡・散布地	縄文・古墳～近世
88	有鹿遺跡	上郷、河原口	散布地	弥生・平安～近世
89	杉久保釜坂遺跡	杉久保北、大谷南	集落跡	旧石器・縄文・奈良～近世
90	杉久保内藤原遺跡	杉久保北一丁目	集落跡	縄文～近世

綾瀬市

遺跡No.	遺跡名	所在地	種別	主要時期
被27	宮久保遺跡	綾瀬市早川	集落跡	

2. 相模国分寺関連遺跡調査歴（第4図、第3表）

相模国分寺関連遺跡は、平成19年度までに30地点以上で調査が実施されており、第3表に各地点の詳細を示した。調査次数については、平成7年（須田ほか1995 文献75）に整理されたものを踏襲し、その後の調査時数を整理掲載した。逆川跡については相模国分寺関連遺跡として調査が実施されているものもあるため、これまで調査次数が振られていなかったものについてのみ付番した。

相模国分寺関連遺跡の調査は、史跡相模国分寺跡の周辺地における開発事業や下水道整備事業に伴い、昭和60年代から始まったもので、相模国分寺跡に関連する遺構が確認される可能性が高いため、一貫した調査体制で行うことを目的とし、海老名市教育委員会に事務局を置く相模国分寺遺跡調査会（後に海老名市遺跡調査会に名称変更）で行っていた。平成14年

に海老名市遺跡調査会は解散し、その後は開発事業に伴う試掘や個人住宅建設に伴う発掘調査について海老名市教育委員会で実施している。

これまでの発掘調査の結果、史跡相模国分寺に伴う遺構として0-2、0-4、4 A、9 B、11、15、16次調査で南北方向に平行する2条の溝が、また20-22次調査では東西方向の溝が確認され、寺域の西と南を区画する溝とみられる。このほか周辺での奈良・平安時代の遺構としては、史跡北側で竪穴建物等が散漫に認められている。

逆川跡については昭和24年に発掘調査が行われたが、記録資料や出土品の所在は不明で、調査地点も含め詳細は不明である。下水道整備事業に伴い国分寺関連2、4次C調査で部分的に逆川跡と思われる遺構を確認しているが、古代の逆川の全容は明らかになっていない。

一方で、1、10、11、14～16次等多くの調査地点で古墳時代の竪穴建物跡が確認されており、特に台地西側には古墳時代前期の遺構が濃密に存在し、環濠も確認されていることから、一帯に大規模な集落が存在するものとみられる。このほか、0-1次調査では縄文時代前期の竪穴住居跡が確認されているほか、縄文時代前～中期の土器も散漫ながら出土している。

なお、史跡相模国分寺跡地内においても史跡整備等に伴い11次に亘って調査を実施している（須田ほか2012 文献77）。

第3表 相模國分寺関連遺跡・逆川跡調査歴一覧

相模國分寺関連遺跡

調査 次数	調査 年度	調査地名	目的	調査機関	内容	遺跡等	主な時代	文献
0・1次	S61	国分寺・丁目1938番地	共同住宅建設	相模國分寺道跡調査会	発掘調査	瓦窯跡、廐穴墓跡等、土坑	绳文、古墳～平安	32,112
0・2次	S61	国分寺・丁目1日地内	下水道工事	相模國分寺跡地調査調査会	発掘調査	廐穴墓跡等、廐穴式墓葬等、出土遺物等	古墳、奈良～平安、中世、近世	75
0・3次	S63	国分寺・丁目1942番地先	下水道工事	海老名市教育委員会	試掘調査	なし		33
0・4次	S63	国分寺・丁目1890番地1	共同住宅建設	相模國分寺道跡調査会	試掘調査	廐穴墓跡等、廐穴式墓葬等	奈良～平安	161
0・5次	H1	国分寺・丁目1879番地	学術調査	相模國分寺道跡寺域範囲調査会	発掘調査	なし		
0・6次	H2	国分寺・丁目1878番地1	学術調査	相模國分寺道跡寺域範囲調査会	発掘調査	廐穴墓跡等		
1次	H1	国分寺・丁目1890番地1	共同住宅建設	相模國分寺道跡調査会	発掘調査	廐穴墓跡等	古墳、奈良～平安、近世	101
2次	H1	国分寺・丁目1861番地先外	下水道工事	相模國分寺道跡調査会	発掘調査	逆川跡	奈良～平安、近世	101
3次	H3	国分寺・丁目1956番地2	個人住宅建設	相模國分寺道跡調査会	発掘調査	廐穴墓跡等、土坑、瓦窯跡等	绳文、古墳、奈良～平安	75
4次A	H3	国分寺・丁目13番50号先、8番11号先	下水道工事	相模國分寺道跡調査会	発掘調査	廐穴墓跡等、廐穴墓葬等 B：廐穴墓葬等 C：廐穴墓、土坑	绳文、古墳、奈良～平安、近代	75
4次C	H4	国分寺・丁目13番19号先	店舗兼住宅建設	相模國分寺道跡調査会	発掘調査	なし		
5次	H4	国分寺・丁目13番7番地	店舗兼住宅建設	相模國分寺道跡調査会	発掘調査	なし		69
6次	H5	国分寺・丁目1877番地5、1877番地7	下水道工事	相模國分寺道跡調査会	発掘調査	ビット3	中～近世	109
7次	H5	国分寺・丁目10番5号先～10番11号先	下水道工事	海老名市教育委員会	発掘調査	廐穴墓跡等4、ビット1	古墳、平安	70
8次	H6	国分寺・丁目1976番11番	共同住宅建設	海老名市遺跡調査会	発掘調査	廐穴墓跡1、廐穴式墓葬1	平安～中世	71
9次A	H6	国分寺・丁目19番19号先～27号先	下水道工事	海老名市遺跡調査会	発掘調査	廐塚1、廐穴墓跡3、廐2	绳文～平安	71
10次A	H6	国分寺・丁目19番41号先～43号先	下水道工事	海老名市遺跡調査会	発掘調査	廐穴墓跡等4、廐1	古墳、奈良～平安	71
10次B	H6	国分寺・丁目19番39号先～40号先	下水道工事	海老名市遺跡調査会	発掘調査	逆川跡等4、廐穴墓葬等1、廐穴式墓葬等1、廐穴墓葬等5	古墳、奈良～平安	72,74
11次	H7	国分寺・丁目1964番地外	宅地造成	海老名市遺跡調査会	発掘調査	逆川跡等4、廐穴墓葬等1、廐穴墓葬等1	奈良～平安	本書
12次	H7	国分寺・丁目1865番地、1867番地、 1882番地2	共同住宅建設	海老名市遺跡調査会	発掘調査	廐穴墓跡等4、廐穴墓葬等1、土坑3	奈良～平安	本書
13次	H8	国分寺・丁目1942番1	個人住宅建設	海老名市教育委員会	発掘調査	なし		73
14次	H12	国分寺・丁目1964番地1の一部	個人住宅建設	海老名市遺跡調査会	発掘調査	廐穴墓跡3、廐状遺跡1、	古墳、奈良～平安	27
15次	H13	国分寺・丁目1964番地5	宅地造成	国分寺道跡調査第15次発掘調査会	発掘調査	逆川跡等4、廐状遺跡2	古墳、奈良～平安	105
16次	H13	国分寺・丁目1964番地7	宅地造成	国分寺道跡調査第16次発掘調査会	発掘調査	逆川跡等3、廐状遺跡2、土坑2	古墳、奈良～平安	105
17次	H14	国分寺・丁目1888番地2外	個人住宅建設	海老名市教育委員会	試掘調査	廐状遺跡1、土坑1	奈良～平安	
18次	H14	国分寺・丁目1964番地6	駅事業整備	海老名市教育委員会	試掘調査	廐状遺跡1	古墳	
19次	H14	国分寺・丁目1980番7、9	個人住宅建設	海老名市教育委員会	試掘調査	なし		
19・2次	H14	国分寺・丁目1939番地4	宅地造成	海老名市教育委員会	試掘調査	廐状遺跡1、土坑1	奈良～平安	
19・3次	H16	国分寺・丁目1963番地8	個人住宅建設	海老名市教育委員会	試掘調査	逆川跡	奈良～平安	
20次	H16	国分寺・丁目1885番地4外	学術調査	海老名市教育委員会	確認調査	逆川跡等1、廐状遺跡1、廐塚1	奈良～奈良～平安	34
20・2次	H17	国分寺・丁目1938番地6、10	個人住宅建設	海老名市教育委員会	試掘調査	逆川跡、土坑1	绳文～奈良～平安	
21次	H19	国分寺・丁目1888番地6	個人住宅建設	海老名市教育委員会	発掘調査	逆川跡等、廐状遺跡1、 不可逆跡3	平安	35

逆川跡

調査 次数	調査 年度	調査地名	目的	調査機関	内容	遺跡等	主な時代	文献
逆川跡 1次	S24	国分1845	学術調査	轟口之	発掘調査	逆川跡、奈若寺跡、 廐、官室跡	奈良～平安、中世？	111
国分 2次	H1	国分寺・丁目1861番地先外	下水道工事	相模國分寺道跡調査会	発掘調査	逆川跡	奈良～平安	101
逆川跡 2次	H2	国分寺尾寺324番地7	共同住宅建設	海老名市N-37遺跡調査会	発掘調査	逆川跡（古縄）	不明	125
国分 4次C	H3	国分寺・丁目13番50号先	下水道工事	相模國分寺道跡調査会	発掘調査	逆川跡（新縄）	近代	75
国分 12次	H7	国分寺・丁目1865番地、1867番地、 1882番地2	共同住宅建設	海老名市遺跡調査会	発掘調査	逆川跡等	奈良～平安	本書



第4図 相模國分寺関連遺跡調査地点 [S=1/3,000] ※番号は第3表調査次数と対応

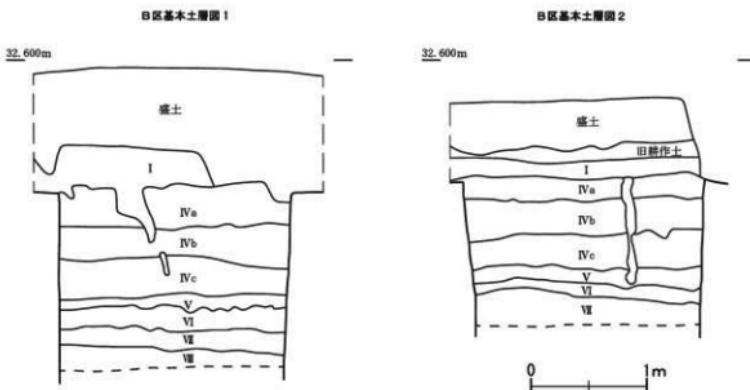
第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法（第5図）

第12次調査の調査区は、南北2か所に分かれていることから北側の地区を「A区」、南側の地区を「B区」とした。表土層の掘削は重機を用いて行い、それ以下及び遺構については人力で行った。記録は、A・B区を網羅する国家座標（日本測地系第Ⅲ区）を設定しそれを基に測量を行うこととし、各遺構に対しては随時、平面・断面図・微細図等（縮尺1/10・1/20等）を作成し、それにあわせ35mm写真等を撮影した。また全景写真は高所作業車を用いて撮影した。

第2節 基本層序（第5図）

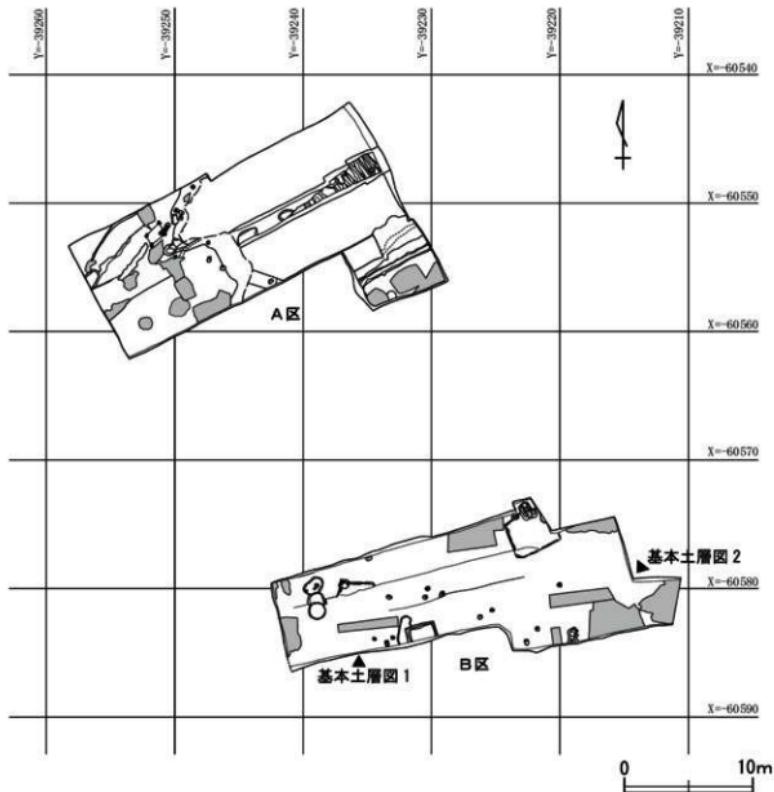
B区南壁と東壁の土層断面を基本層序として図示した。ここでの層位番号は相模国分寺跡標準土層（文献99）を基にしたものである。最上層である現地表面下には40～70cmの盛土が施され、A・B区ともに見られる。その下層には部分的に旧耕作土が認められる。中世～近世に当たるII層は本調査区内では認められず、弥生時代～平安時代にあたるIII層もごく一部で残存しているにすぎなかった。縄文時代の包含層であるIV層は、所謂富士黒色土層で90～100cmと安定した堆積を示している。



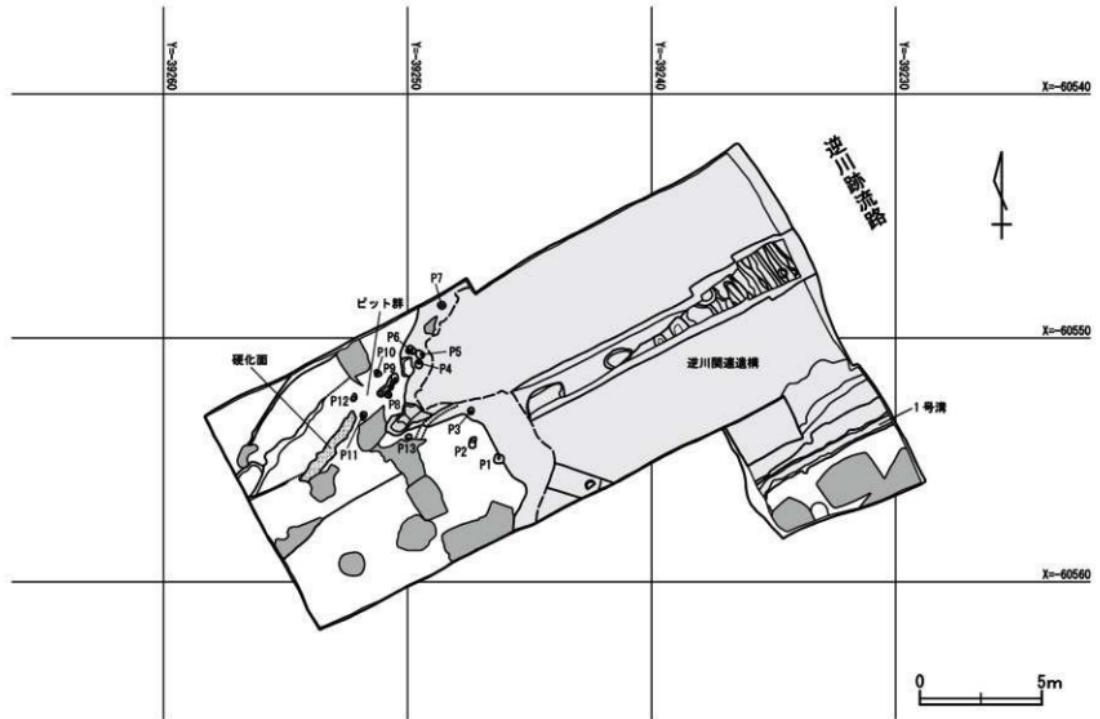
第5図 基本層序 [S=1/40]

- I 層 灰褐色土 (7.5YR4/2) 極小の赤色スコリア7～10%含む。しまりやや密、粘性弱く、やや硬い。
IVa層 黒褐色土 (7.5YR3/1) 極小の赤色スコリア7～10%含む。しまり密、粘性普通で、硬い。
IVb層 黒褐色土 (7.5YR3/1) 極小の赤色スコリア2～3%含む。しまり非常に密、粘性強く、硬い。
IVc層 黒褐色土 (7.5YR3/1) 極小の赤色スコリア3～5%含む。しまり非常に密、粘性強く、硬い。

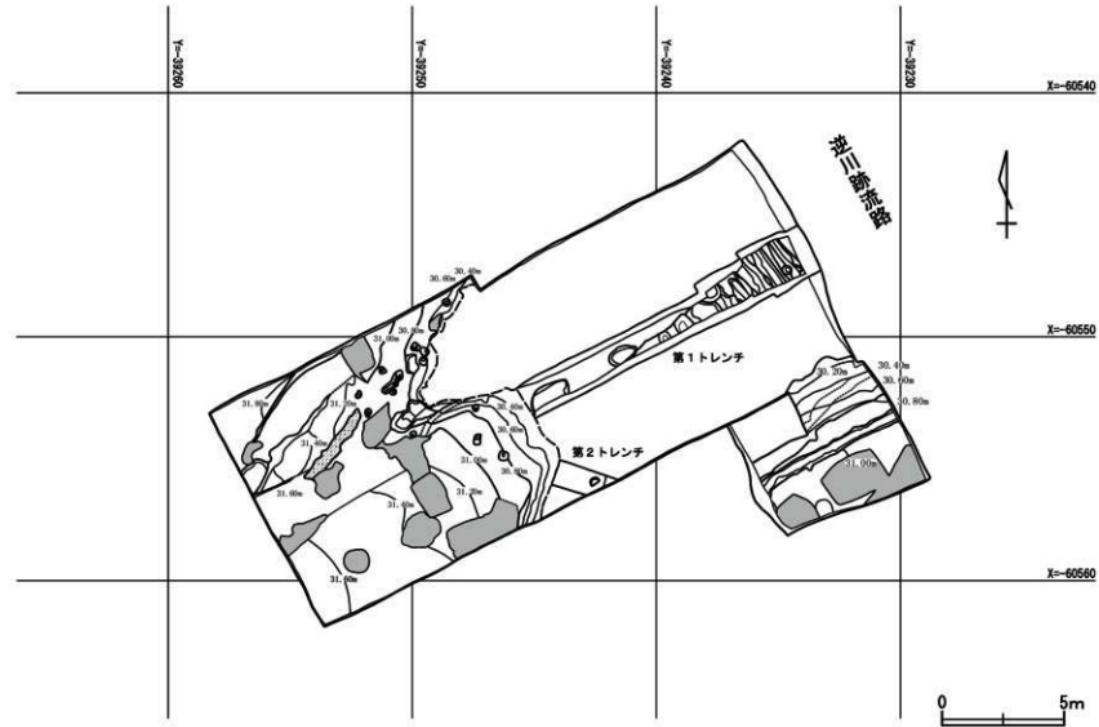
- V 層 黒褐色土 (7.5YR3/1) 極小の赤色スコリア5~7%含む。しまり非常に密、粘性強く、硬い。
- VI 層 褐色土 (7.5YR4/4) ローム漸移層で、極小の赤色スコリア10~15%、黒色スコリア5~7%含む。しまり非常に密、粘性強く、硬い。
- VII 層 明褐色土 (7.5YR5/8) 関東ローム層L1S相当層で、極小の赤色スコリア10~15%含む。しまり非常に密、粘性強く、硬い。
- VIII 層 明褐色土 (7.5YR5/8) 関東ローム層B0相当層で、極小の赤色スコリア10~15%含む。しまり非常に密、粘性強く、硬い。



第6図 A・B区全体図 [S=1/400]



第7図 A区造構全体図（1）[S=1/200]



第8図 A区遺構全体図（2）[S=1/200]

第3節 発見された遺構と遺物

今回の調査で確認された遺構は、逆川関連遺構、竪穴建物跡3軒、土坑5基、ピット群である。

遺物は遺構内、遺構外を合わせて土師器、須恵器、ロクロ土師器、灰釉陶器、瓦、鉄滓等が整理箱8箱出土した。総量は1,167点、総重量は65,216gで、土師器が775点、6,535.9gと数量的には出土遺物の約66%を占めている。瓦は総数213点、総重量43,141.4gと土師器に次いで多く、遺存状況が良いものが多く出土している。

1. 奈良～平安時代

(1) A区 (第7、8図)

1) 逆川関連遺構 (第9～13図、第4表、写真図版2～5・10)

調査区中央から東側で確認され、南東付近では南側の立ち上がりは確認されたが、北側はごく一部を確認したのみで、大半が調査区外に延びている。確認規模は北西～南東14.90m、南西～北東18.60mで、長軸方向はN-55°-Eである。

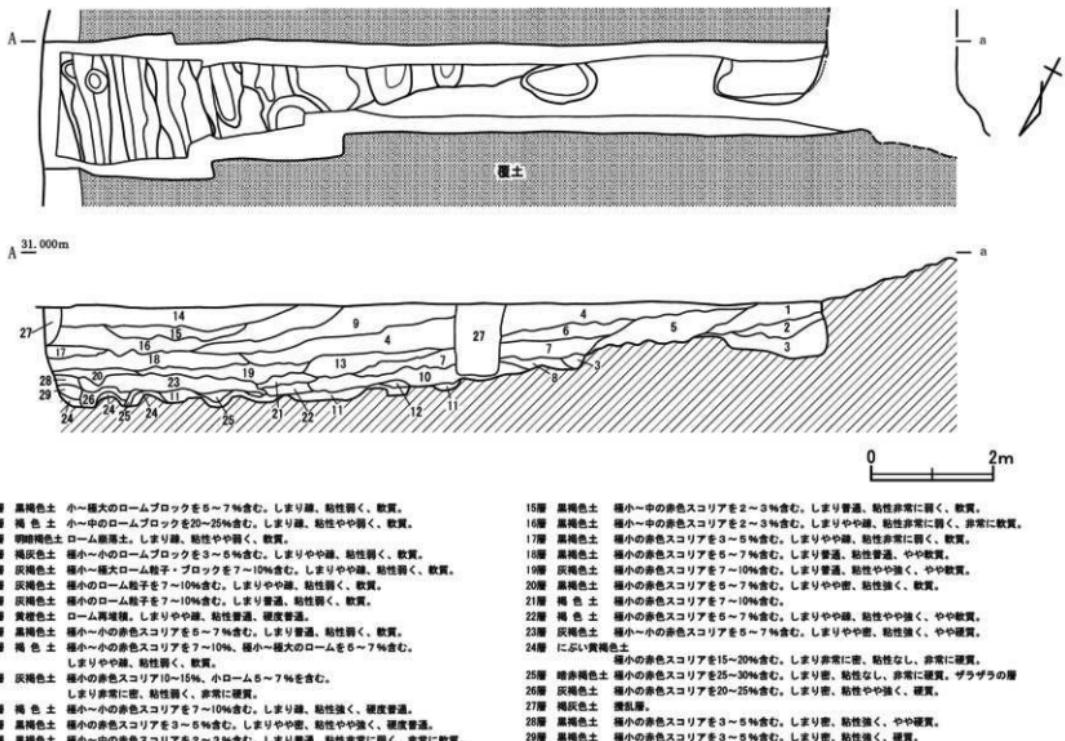
調査は中央付近に南西～北東方向の第1トレンチと調査区中央付近南側に東西方向の第2トレンチを設定して行った。

中央付近の第1トレンチでは逆川跡流路側から南西方向に立ち上がる法面を確認した。底面中央から東側は幅60～80cm、深さ20～40cm程の波板状の凹凸が見られ、中央から西側は約12度の角度で西に向かって高くなっている。その高低差は約1.9mである。覆土は比較的軟質であるが、最下層で波板状の凹凸を覆っている11・24層（第9図）は非常に硬質である。

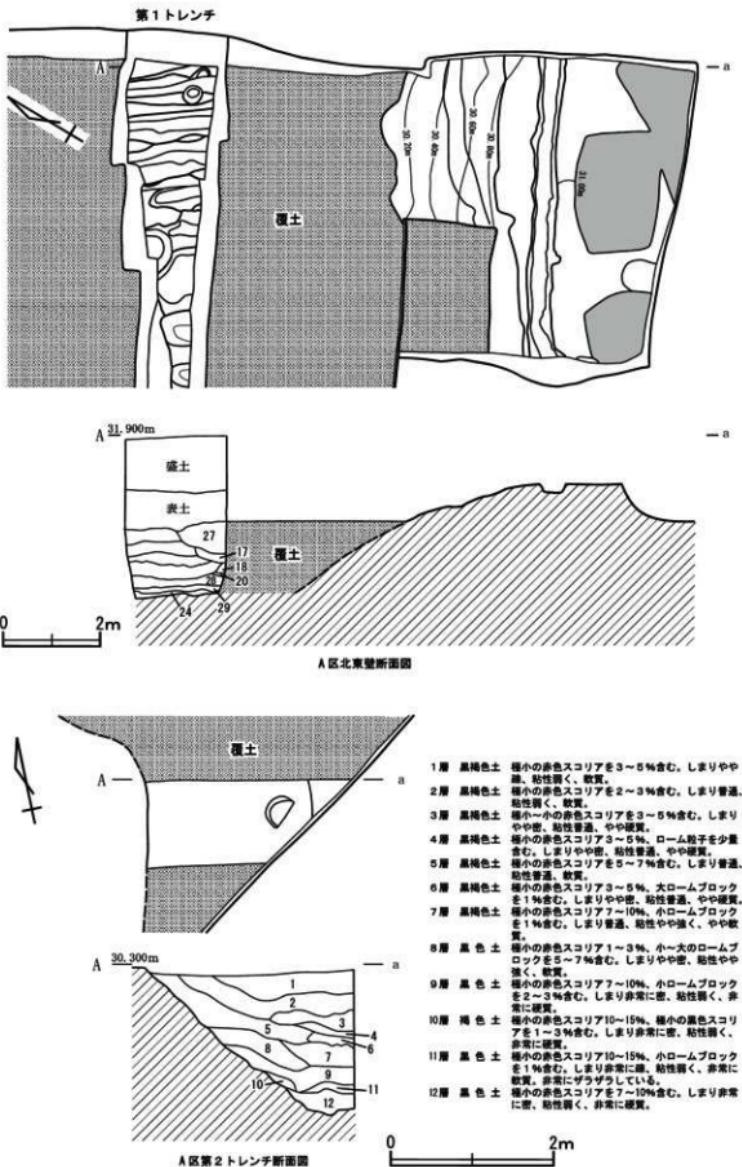
南側の第2トレンチではごく僅かではあるが底面と立ち上がりの法面を確認した。法面は約39度の角度で立ち上がり高低差は1.7mである。底面にはやや凹凸があり、底面付近の法面ではピット状の掘り込みが確認された。覆土は比較的軟質であるが下層の12層と9・10層（第10図）が非常に硬質である。凹凸部の最も低い部分で標高約28mを測る。

調査区南東で確認された南側の立ち上がりは、法面の上半部分のみで、下半部分は未調査である。法面の傾斜は26度程と推測され、高低差は約2、3mである。法面上部には犬走り状の幅の狭い平坦部が法面に沿うように認められたほか、法面上端から20～70cm離れたところには、幅40～50cmの溝状遺構（1号溝）が長さ約6m確認された。主軸方向はN-61°-Eで、法端部に沿うように認められたことから本遺構に附属する施設と推測される。

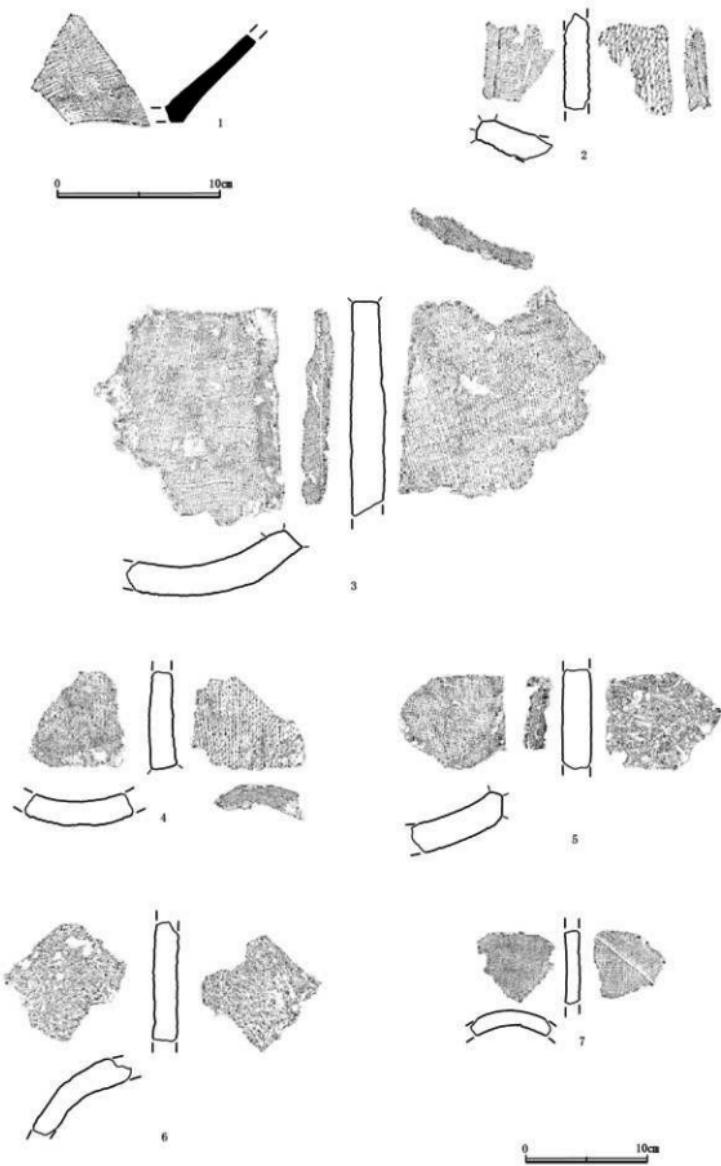
また、本遺構西側の立ち上がり（法上端）は階段状にローム層が掘り込まれており、その端部から約2.5m西側で、北東～南西に延びる長さ3.55m、幅0.55mの硬化面が認められた。この硬化面は階段状の掘り込みをと同一の方向をとることから、遺構に伴うものではないかと推測される。



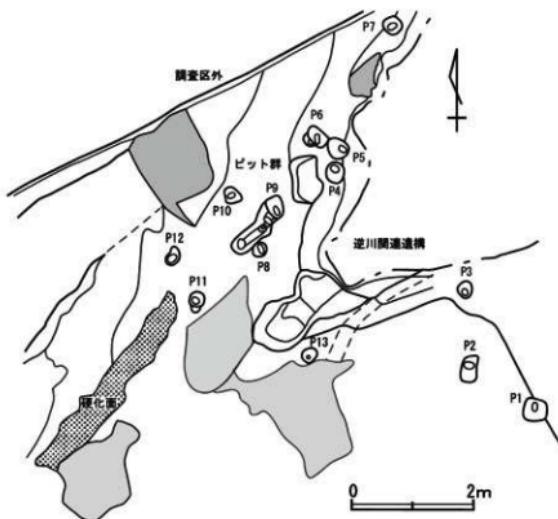
第9図 逆川関連構造第1トレンチ平面図・断面図 [S-1/80]



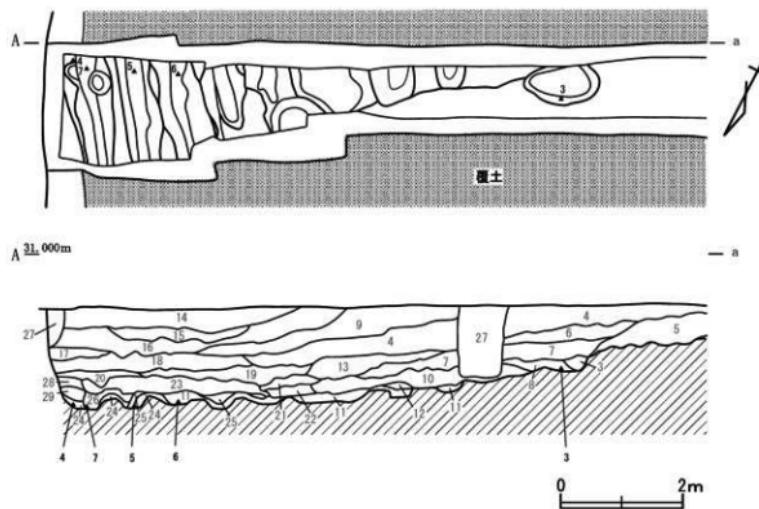
第10図 逆川関連遺構平面図・断面図 [S=1/100・1/60]



第11図 逆川関連遺構出土遺物 [S=1/3・1/4]



第12図 逆川関連遺構西側階段状部分と周辺ピット群 [S=1/80]



第13図 逆川関連遺構遺物分布図 [S=1/80]

出土遺物

覆土中から土師器・須恵器坏・甕片、灰釉陶器壺、瓦等が出土した。遺物は遺構底部の波板状凹凸の凹部から多く出土しており、完成品ではなく、瓦も比較的小さな破片が多い。内訳は土師器坏35点で、甕132点、須恵器坏2点、甕8点、灰釉陶器壺1点、平瓦66点、丸瓦14点、不明瓦29点の計287点で、重量は8,524.0gである。この他、波板状凹凸の凹部から馬骨とみられる骨片が出土した。

1は須恵器、2～7は瓦、8は鉄滓で、1は甕、2～5は平瓦、6・7は丸瓦である。なお8の鉄滓は図示していないため、詳細は遺物観察表（第4表）、写真図版（写真図版10）を参照していただきたい。

1は胴部に平行叩き具痕が残る。2～4は凹面に布目痕、凸面に繩叩き具痕が残る。2・3は凹面端部に面取りがみられる。5～7は凸面が繩叩き具痕をナデ消し、凹面は布目痕を残す。5は凹面端部に面取りが見られる。5は焼き歪みが見られ、表面全体が摩滅し滑らかである。7は凹面に布の重ね目が顕著に残る。2～7の生産瓦窯は2・5・7が瓦尾根瓦窯系、3・4・6が乘越瓦窯系と考えられる。

第4表 逆川関連遺構出土遺物観察表

() 内数値は口径・底径が復元径、器高は現存高 単位cm、重量g

1	須恵器 甕	現存率 1/4以下 調整 外面：胴部平行叩き、下端ヨコケズリ 内面：ヨコナデ 磨上 粗砂粒 焼成 良好 色調 灰色 出土位置 覆土
2	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 凹面：布目痕。側端部面取り 凸面：純目叩き 磨上 粗砂粒 焼成 普通 色調 灰白色 出土位置 2Tr覆土 重量 1153 g 備考 鋏端2面面取り。瓦尾根瓦窯系。
3	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 凹面：布目痕。側端部面取り 凸面：純目叩き 磨上 粗砂粒・砂っぽい 焼成 普通 色調 黒灰色 出土位置 1Tr No.103 重量 1,059 g 備考 鋏端面面取り。乗越瓦窯系。
4	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 凹面：布目痕。広端部面取り 凸面：純目叩き 磨上 粗砂粒・白色粒 焼成 普通 色調 銀灰銀黄 出土位置 1Tr No.1 重量 194.8 g 備考 広端面面取り。全体に摩滅し滑らか。乗越瓦窯系。
5	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 凹面：布目痕。側端部面取り 凸面：純目叩き、ナデ 磨上 粗砂粒 焼成 普通 色調 凸面：灰色 四面：灰オーバー色 出土位置 1Tr No.38 重量 245.1 g 備考 鋏端面面取り。全体に摩滅し滑らか。瓦尾根瓦窯系。
6	瓦 丸瓦	現存率 1/4以下 調整 凸面：繩叩きナデ消し 凹面：布目痕 磨上 粗砂粒 焼成 普通 色調 凸面：黄灰色 四面：黄灰色、にぶい黄褐色 出土位置 No.68 重量 200.8 g 備考 焼き歪み。全体に摩滅し滑らか。乗越瓦窯系。
7	瓦 丸瓦	現存率 1/4以下 調整 凸面：繩叩きナデ消し 凹面：布目痕 磨上 粗砂粒 焼成 普通 色調 黄灰色 出土位置 1Tr No.16 重量 64.6 g 備考 凹面重ね目あり。瓦尾根瓦窯系。
8	鉄滓	現存率 完形 寸法 長さ 8.5 幅 7.1 厚さ 3.4 重量 64.6 g 出土位置 2Tr 覆土中

2) ピット群（第12図、表5、写真図版5）

調査区北西部に位置し、東～西方向に延びる逆川関連遺構の西側の法面付に所在する。確認されたピットの数は13基、規模は軸長20～40cm 大が大半である。深さは10～44cm である。掘立柱建物跡の可能性も検討したが、明確な規則性は見出せない。逆川関連遺構に伴う杭や樋等の施設の可能性もあるが、同様のピット群はB区にもみられる。遺物の出土もなく、時期は不明である。

第5表 A区ピット計測表

単位: cm

遺構番号	平面形態	長軸	短軸	深さ
P 1	方形	40	35	44
P 2	長方形	43	25	25
P 3	方形	25	25	27
P 4	方形	33	30	-
P 5	楕円形	35	30	-
P 6	不整形	35	32	-
P 7	方形	30	29	-
P 8	円形	23	22	10
P 9	不整形	110	25	28
P 10	方形	25	22	21
P 11	不整形	33	25	21
P 12	不整形	27	20	13
P 13	方形	28	20	-

(2) B区 (第14図)

1) 竪穴建物跡

1号竪穴建物跡 (第15~23図、第6表、写真図版6・7・11~13)

調査区北東付近に位置し、東側の一部が調査区外に延びている。南側の上部は試掘トレチにより削平されている。規模は、東西3.74m、南北3.1mで、北壁の中央付近でカマド西側部分は20cm程突出している。深さは11~20cmで、南・西壁際には幅10~21cm、床面からの深さ3~10cmの周溝が途切れ途切れではあるが認められる。床面は貼り床ではなくである。柱穴は認められなかった。主軸方向はN-21°-Wである。覆土は黒褐色土主体で赤色・黒色スコリアを含むものである。

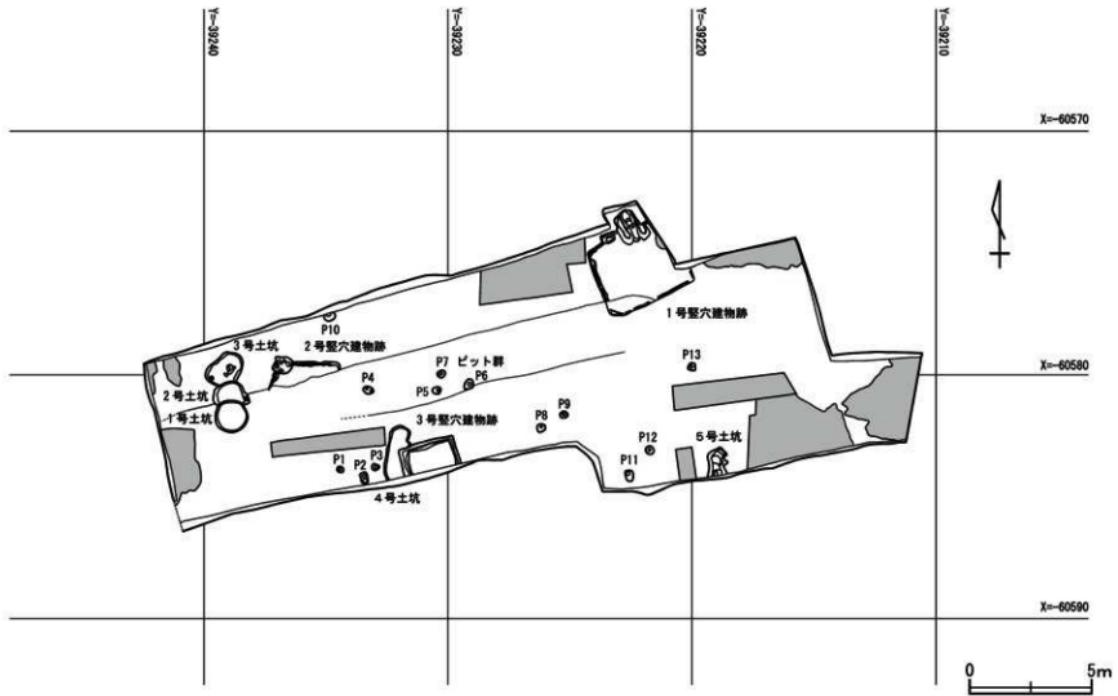
カマドは北壁中央やや東寄りに壁を掘り込んで施設されており、規模は長さ137cm、幅93cmで、壁外への掘り込みは奥行き62cmの楕円形状である。袖の作り出しは、壁から58~75cm、幅45~50cmである。袖には心材として川原石、補強材として瓦を多用している。火床中央付近には、丸瓦が凹面を合わせるように直立した状態で確認され、やや浮いた状態ではあるが、支脚として使用されたものと推測される。主軸方向はN-26°-Wである。

掘り方では、規模が1.6×1.4m、深さ20cmの土坑状、規模0.22~0.48m、深さ10~30cmのピット状の掘り込みが認められ、黒褐色土で埋め戻されていた。

出土遺物

遺物は、南側の上部が削平されていることから、少ないが、カマド内及びその周辺から土師器壺や瓦等が出土しているほか、覆土中から土師器壺・壺片、須恵器壺、灰釉陶器壺・皿等が出土した。内訳は土師器壺42点、壺340点、須恵器壺10点、壺1点、ロクロ土師器壺1点、灰釉陶器壺3点、皿1点、平瓦23点、丸瓦22点の計443点で、重量は22,010.4gである。

1~3・10~13は土師器、4は須恵器、5はロクロ土師器、6~9は灰釉陶器、14~27は瓦である。1~5は壺、6~8は壺、9は皿、10~12は壺、13は台付壺、14~20は平瓦、

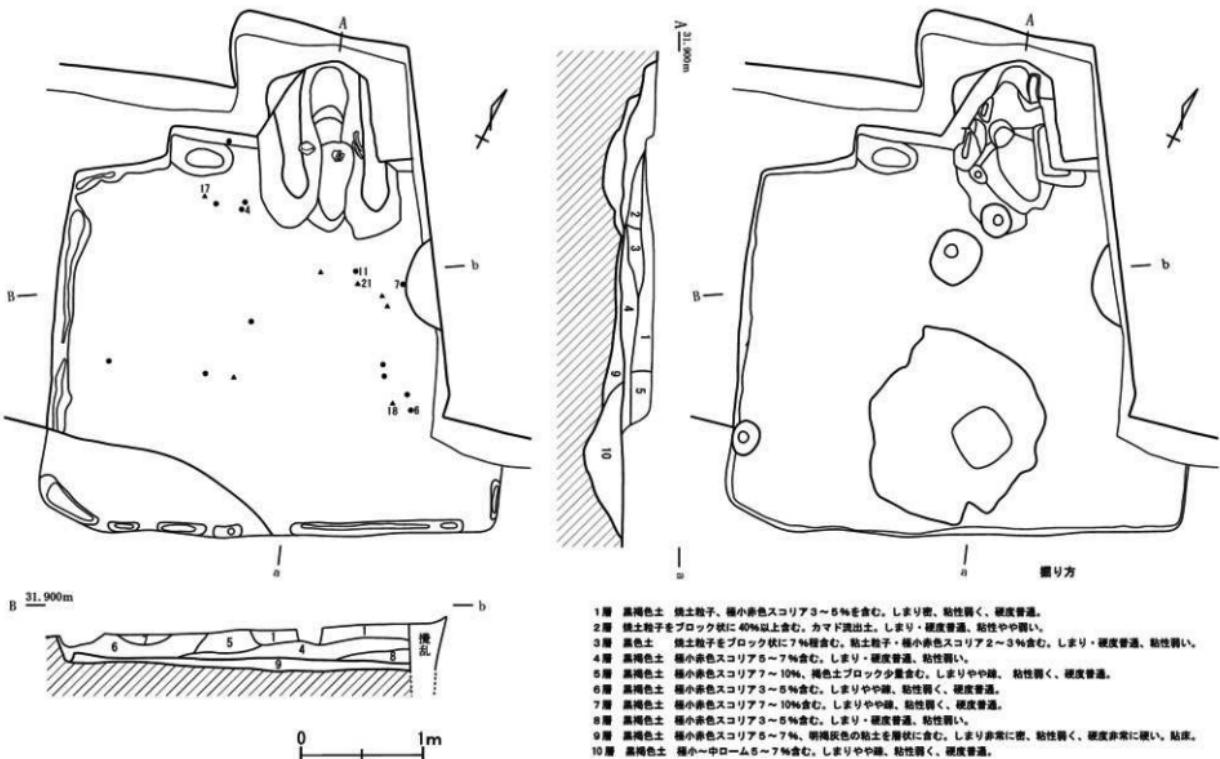


第14図 B区遺構全体図 [S=1/200]

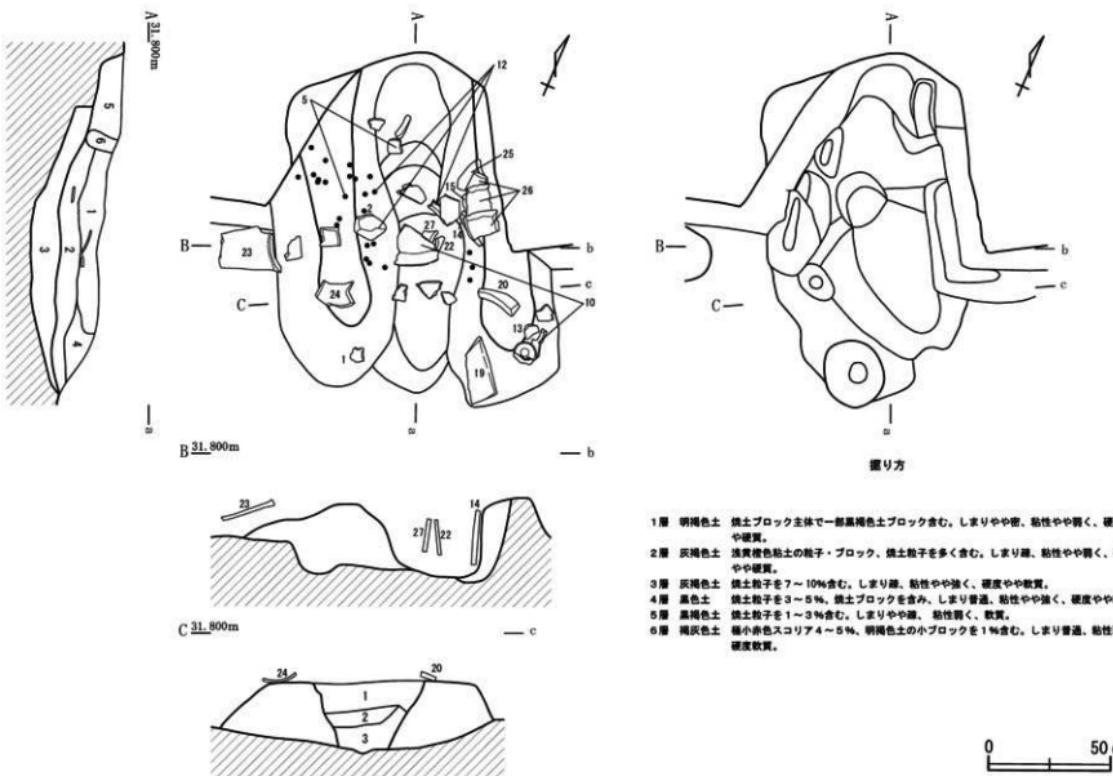
21~27は丸瓦である。

1・2は体部ヨコヘラケズリ、3は体部に指頭痕が残り、いずれも相模型である。4はロクロ成形で底部に糸切り痕を残す。5はロクロ成形。6・8は内面と外面の一部に煤とみられる黒色の付着物が認められる。7は三日月高台。9は内面の口縁部付近に釉溜りが見られる。10は相模型兜。11・12は小型兜と見られる。13は脚部外面にハケメが見られる。14~20は凹面に布目痕、凸面に繩叩き具痕が見られる。14・18~20は凹凸面に、16は凹面に面取りがある。側端面は15が2面面取りで、他は1面と考える。広・狭端は14・15が凹凸面、18・20が凹面の端部面取り仕上げ。また16が広端部、20が狭端部に隅切りがみられる。21は有段丸瓦で段部が欠損している。22~26は凸面繩叩き具痕をナデ消し、凹面には布目痕を残す。25の凸面には二条の沈線が認められ、26には沈線状の段が認められる。側端面は22~24が凹面で面取りが認められるほかは1面の面取りで、22~24・26に糸切り痕が認められる。広端は23・25・26が凸凹面で面取りが認められる。14~27の生産瓦窯は14~16・18・20・21・27が瓦尾根瓦窯系、17・19が乘越瓦窯系、22~26が御殿山瓦窯系と考えられる。

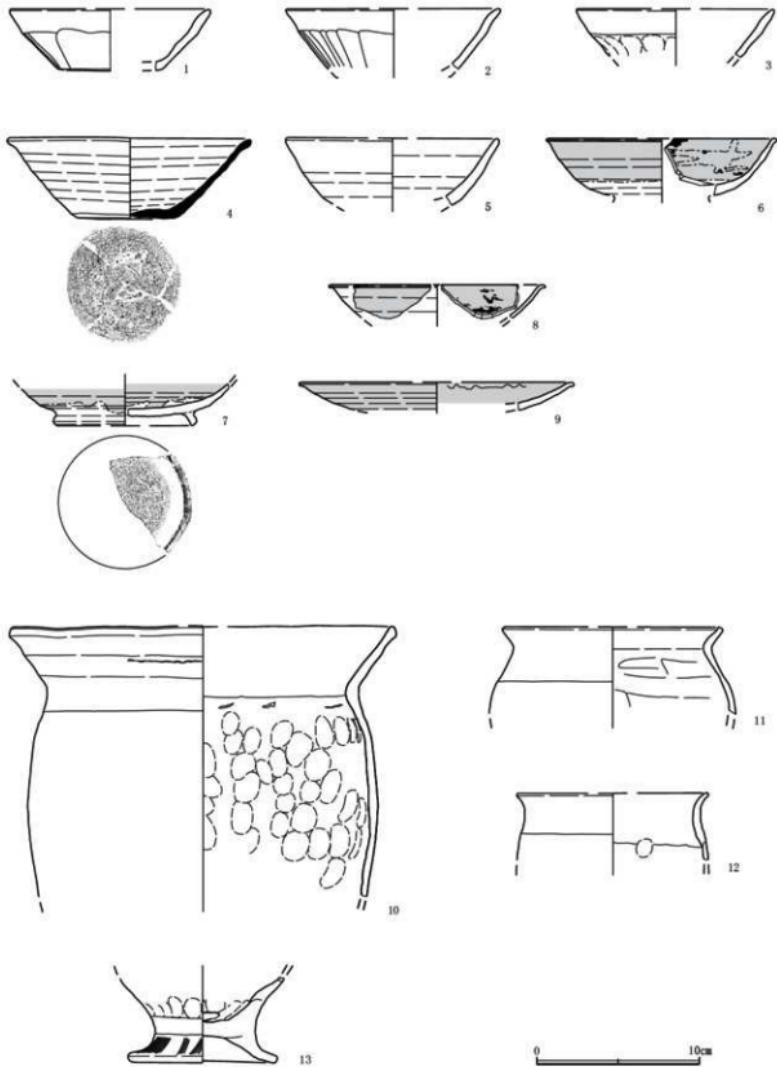
時期は、出土遺物から9世紀第4四半期~10世紀初頭と考えられる。



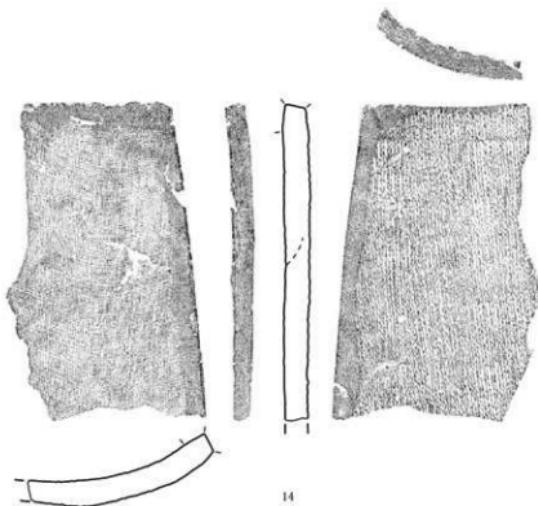
第15図 1号竪穴建物跡平面図・断面図 [S=1/40]



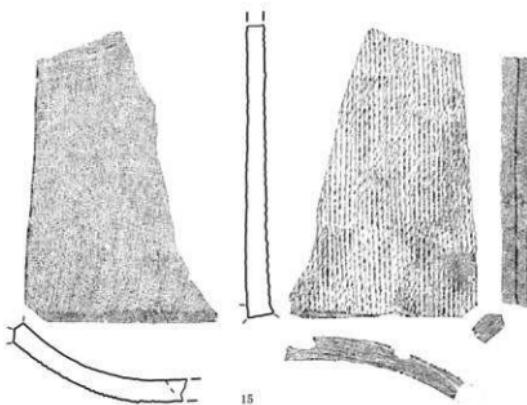
第16図 1号竪穴建物跡カマド平面図・断面図 [S=1/20]



第17図 1号竪穴建物跡出土遺物（1） [S=1/3]



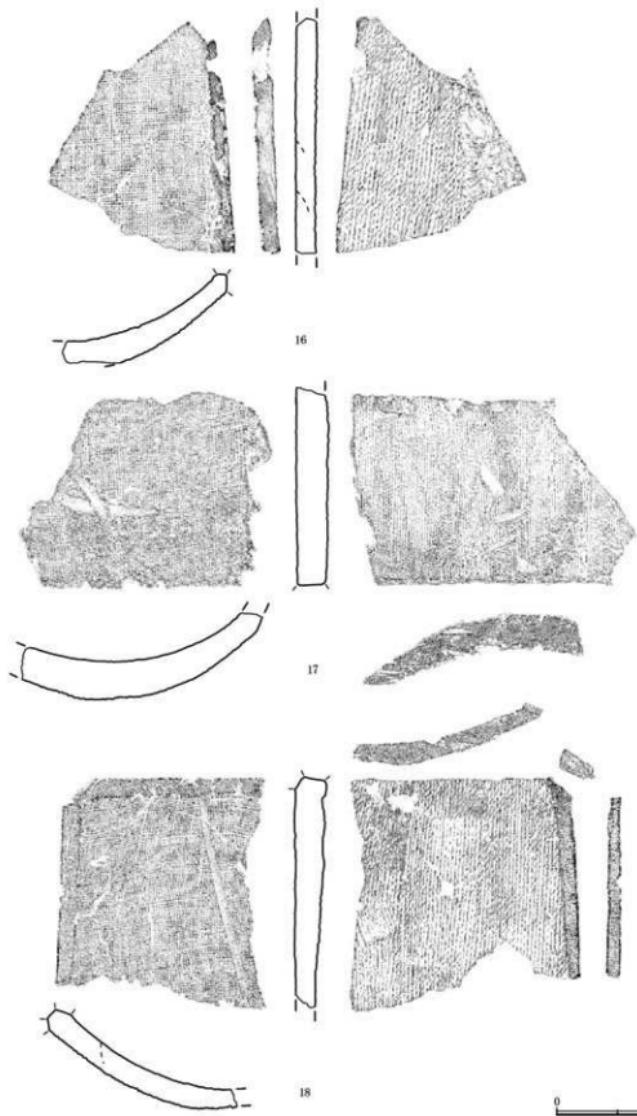
14



15

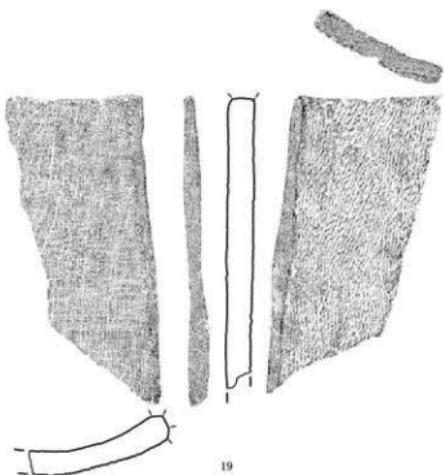
0 10cm

第18図 1号竖穴建物跡出土遺物（2） [S=1/4]

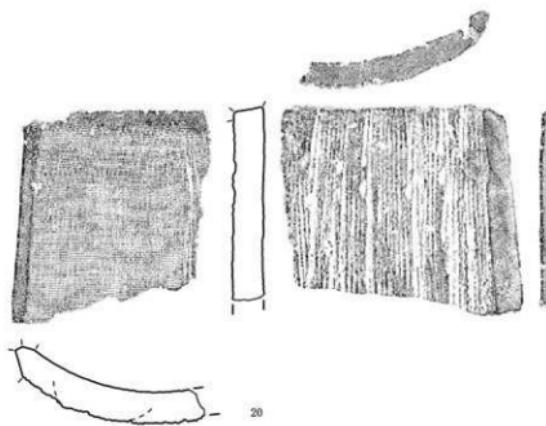


0 10cm

第19図 1号竖穴建物跡出土遺物 (3) [S=1/4]



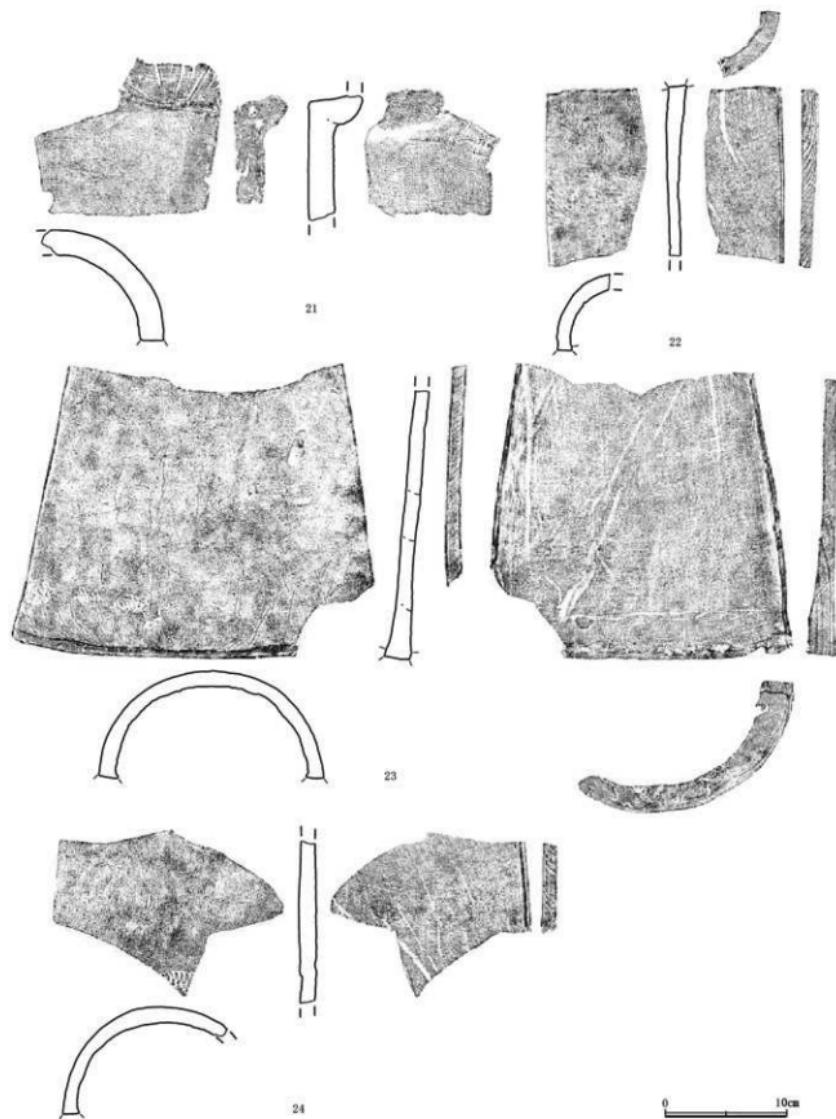
19



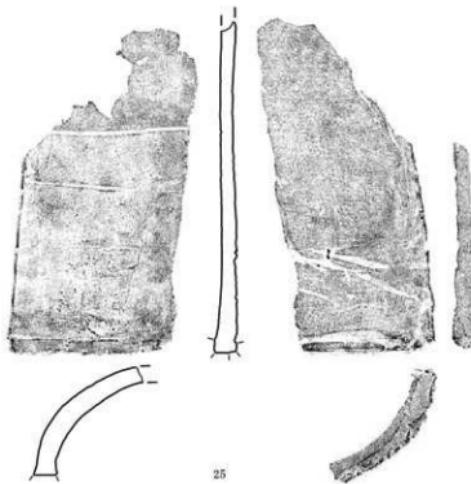
20

0 10cm

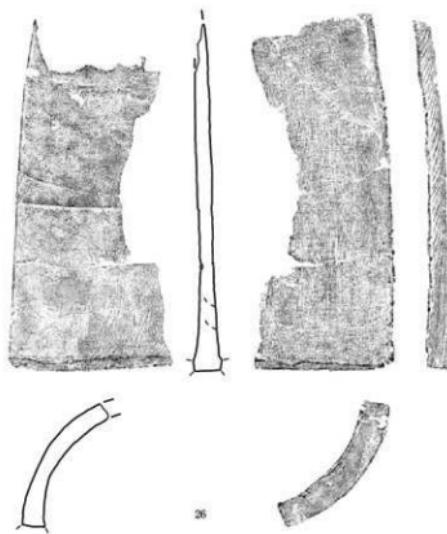
第20図 1号竪穴建物跡出土遺物（4） [S=1/4]



第21図 1号竪穴建物跡出土遺物（5） [S=1/4]



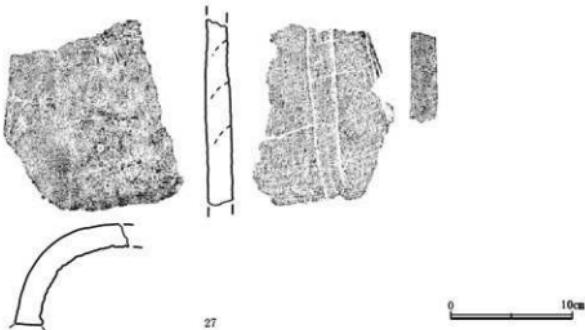
25



26

0 10cm

第22図 1号竪穴建物跡出土遺物 (6) [S=1/4]



第23図 1号竖穴建物跡出土遺物 (6) [S=1/4]

第6表 1号竖穴建物跡出土遺物観察表

		()内数値は口径・底径が復元径、器高は現存高 単位cm、重量g
1	土師器 壺	法量 口径(12.4) 器高(3.8) 底径(6.8) 現存率 1/3 調整 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコケズリ 内面：ヨコナデ 胎土 相砂粒 焼成 普通 色調 外：にぶい黄褐色 内：黄褐色 出土位置 贰床中 備考 相模型
2	土師器 壺	法量 口径(13.2) 器高(3.7) 現存率 1/4以下 調整 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコケズリ 内面：ヨコナデ 胎土 相砂粒少ない 焼成 良好 色調 明黄褐色 出土位置 カマドNo24 備考 相模型
3	土師器 壺	法量 口径(12.2) 器高(3.0) 現存率 1/4以下 調整 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコケズリ 内面：ヨコナデ 胎土 相砂粒 烧成 良好 色調 外：にぶい黄褐色 内：黄褐色 出土位置 1・2区覆土中 備考 相模型
4	頬窓器 壺	法量 口径15.1 器高4.9 底径6.0 現存率 ほぼ完形 調整 ロクロ成形 底部条切り胎土 相砂粒・白色粒 焼成 良好 色調 灰色 出土位置 No17・カマド・1区覆土中 備考 やや歪みあり。内面やや滑らか。
5	ロクロ土師器 壺	法量 口径(13.2) 器高(4.1) 現存率 1/4以下 調整 ロクロ成形 胎土 相砂粒 烧成 普通 色調 にぶい黄褐色・橙色 出土位置 カマドNo6・28 備考 内外面剥離激しい
6	灰釉陶器 塊	法量 口径(14.4) 器高(3.5) 現存率 1/4以下 調整 ロクロ成形 外・内面：上半施釉 胎土 相砂粒少ない 焼成 普通 色調：素地：灰白色 軸：灰白色 出土位置 No6 備考 全体に施釉が溶け切っていないが部分的にガラス化し光沢がある。内面部分に煤？付着。
7	灰釉陶器 塊	法量 底径(8.2) 器高(2.6) 現存率 1/4以下 調整 ロクロ成形 外：体部施釉。底部切り離し後ケズリ 内面： 体部施釉、見込一筆刷毛胎土 相砂粒少ない 烧成 普通 色調 素地：灰色 軸：灰白色 出土位置 カマド袖No13 備考 付高台・三日月高台。
8	灰釉陶器 塊	法量 口径(8.2) 器高(2.1) 現存率 1/4以下 調整 ロクロ成形 外・内面：施釉 胎土 相砂粒少ない 烧成 良好 色調 素地：灰色 軸：透明 出土位置 4区覆土中 備考 口縁部と内面の一部に煤？付着。灯明皿に転用か。
9	灰釉陶器 皿	法量 口径(17.0) 器高(1.7) 現存率 1/4以下 調整 ロクロ成形 外・内面：施釉 胎土 相砂粒少ない 烧成 良好 色調 素地：灰白色 軸：浅黄色 出土位置 3区覆土中 備考 内外面口縁部付近に釉グレが見られる。
10	土師器 壺	法量 口径(13.4) 器高(1.6) 現存率 1/4以下 調整 外面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、 胴部指頭痕 胎土 相砂粒 烧成 普通 色調 外：暗色 にぶい橙色 内：碧色 出土位置 1区覆土中・カマドNo 12・13 備考 相模型。粘土接合痕
11	土師器 壺	法量 口径(13.6) 器高(5.3) 現存率 1/4以下 調整 外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ、 胴部ヨコヘラナデ 胎土 相砂粒 烧成 普通 色調 外：明褐色 にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色・橙色 出土位置 カマド 小型窓
12	土師器 壺	法量 口径(11.8) 器高(4.1) 現存率 1/4以下 調整 外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヨコヘラナデ？ 内面：口縁部 ヨコナデ、胴部ナデ、指頭痕 胎土 相砂粒 烧成 普通 色調 明褐色 出土位置 カマド 備考 小型窓。内面に粘 土接合痕
13	土師器 台付壺	法量 底径9.2 器高(5.3) 現存率 1/4以下 調整 外面：胴部指頭痕、ヨコナデ、台部ナメハケメ後下ヨコナデ 内面：胴部指頭痕、台部ヨコナデ 胎土 相砂粒 烧成 普通 色調 外：黒褐色・灰黄褐色 内：黄褐色 出土位置 カマドNo42
14	瓦 平瓦	現存率 1/3~1/4 調整 四面：布目板。側・狹端部面取り 凸面：純目叩き具抜。側・狭端部面取り 胎土 相砂粒 焼成 普通 色調 にぶい黄褐色・灰黄褐色 出土位置 カマドNo50 重量 1,405g 備考 模骨板。凸面に粘土接合 痕。側・狹端面面取り。瓦尾根瓦窓系
15	瓦 平瓦	現存率 1/3 調整 四面：布目板。広端部面取り 凸面：純目叩き具抜。広端部面取り 胎土 相砂粒少ない 焼成 不良？ 色調 四面：にぶい黄褐色 凸面：黄褐色・にぶい黄褐色 出土位置 カマドNo51 重量 825.1g 備考 側端面面取り。広端面面取り。瓦尾根瓦窓系

16	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 凹面：布目痕。側端部面取り 凸面：縄目叩き具痕 勉土 粗砂粒・赤色粒 燃成 普通 色調 凹面：にぶい黄褐色 凸面：にほい黄褐色・黄褐色 出土位置 3区複土 重量 6142g 収容 模骨痕。側端面取り。瓦尾根瓦窓系
17	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 凹面：布目痕。ナデ痕 凸面：縄目叩き具痕 勉土 粗砂粒・赤色粒 燃成 普通 色調 凹面：灰色 凸面：灰褐色 出土位置 N011 重量 1,472.0g 収容 広端面面取り。凹面に「X」状の指ナデ痕。乘越瓦窓系
18	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 凹面：布目痕。側・扶端部面取り 凸面：縄目叩き具痕。側端部面取り 勉土 粗砂粒・赤色粒 燃成 普通 色調 暗灰色 出土位置 №5 重量 1,089 g 収容 側・扶端面面取り。隅切り。瓦尾根瓦窓系
19	瓦 平瓦	現存率 1/4 調整 凹面：布目痕。側端部面取り 凸面：縄目叩き具痕。側端部面取り 勉土 粗砂粒・砂っぽい 燃成 良好 色調 暗灰色 出土位置 カマドN054 重量 849.7g 収容 側端面面取り。扶端面面取り。乘越瓦窓系
20	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 凹面：布目痕。側・扶端部面取り 凸面：縄目叩き具痕。側端部面取り 勉土 粗砂粒・やや 砂っぽい 燃成 普通 色調 凹面：にほい黄褐色・灰白色 出土位置 カマドN653 重量 1,052 g 収容 模骨痕。側・扶端面面取り。比較的厚味がある。瓦尾根瓦窓系
21	瓦 有段丸瓦	現存率 1/4以下 調整 凸面：布目痕。側・扶端部面取り 凸面：縄目叩き具痕。側端部面取り 勉土 粗砂粒少ない・赤色粒 燃成 普通 色調 暗灰色・灰褐色 出土位置 N011 重量 474.9g 収容 玉緑。側端面面取り。段部に勉土接合痕、ケズリの後ナデ。瓦尾根瓦窓系
22	瓦 丸瓦	現存率 1/4以下 調整 凸面：縄叩き具痕ナデ消し 凹面：布目痕。側端部面取り 勉土 粗砂粒少ない 燃成 良好 色調 凹面：灰褐色 四面：灰黄色 出土位置 カマドN59 重量 214.5g 収容 側端面面取り。糸切り折。扶端 面面取り。御殿山瓦窓系
23	瓦 丸瓦	現存率 2/3 調整 凸面：縄叩き具痕ナデ消し。一部縄叩き具痕残る。凹面：布目痕。側端付ナデ 勉土 粗砂粒少 ない・綱密 燃成 良好 色調 凸面：暗灰色 四面：灰色・灰褐色 出土位置 カマドN56 重量 1,420 g 収容 側端糸切り折ナデ消し。広端面面取り。御殿山瓦窓系
24	瓦 丸瓦	現存率 1/4以下 調整 凸面：上部ナデ、下部縄叩き具痕 四面：布目痕。側端付近弱いナデ 勉土 粗砂粒少 ない・綱密 燃成 良好 色調 凸面：にほい黄褐色 出土位置 カマドN55 重量 361.1 g 収容 側端糸切 り痕ナデ消し。御殿山瓦窓系
25	瓦 丸瓦	現存率 1/3 調整 凸面：縄叩き具痕ナデ消し。広端部面取り。3条の蛇紋が並行に巡る 凹面：布目痕。側端付近弱 いナデ。広端部面取り 勉土 粗砂粒 燃成 普通 色調 凸面：にほい黄褐色・黄褐色 四面：橙色 出土位置 カ マドN52 重量 642.4 g 収容 側端面面取り。広端面部分的に2面面取り。御殿山瓦窓系
26	瓦 丸瓦	現存率 1/2~1/3 調整 凸面：縄叩き？後ナデ。広端部面取り 四面：布目痕。側端付近部分的にナデ。広端部面取り 勉土 粗砂粒少ない 燃成 普通 色調 凸面：暗灰色 凹面：にほい黄褐色 出土位置 カマドN04 重量 684.3 g 収容 模骨痕。凸面中央や下部に段差が沈線状にある。凹面上部に布施い合わせ病ある。側端に糸切り痕。広端面 面取り。ヨコ粘土絆造り。御殿山瓦窓系
27	瓦 丸瓦	現存率 1/4以下 調整 凸面：ナデ 四面：布目痕 勉土 粗砂粒多い・径5mm大の小槽 燃成 不良？ 色調 凸面： オリーブ褐色・褐色 凹面：にほい黄褐色 出土位置 カマドN58 重量 1,026 g 収容 四面上下に幅約2.5cm の模骨板状の窪みあり。側端面面取り。瓦尾根瓦窓系

2号竪穴建物跡（第24～28図、第7表、写真図版8・13・14）

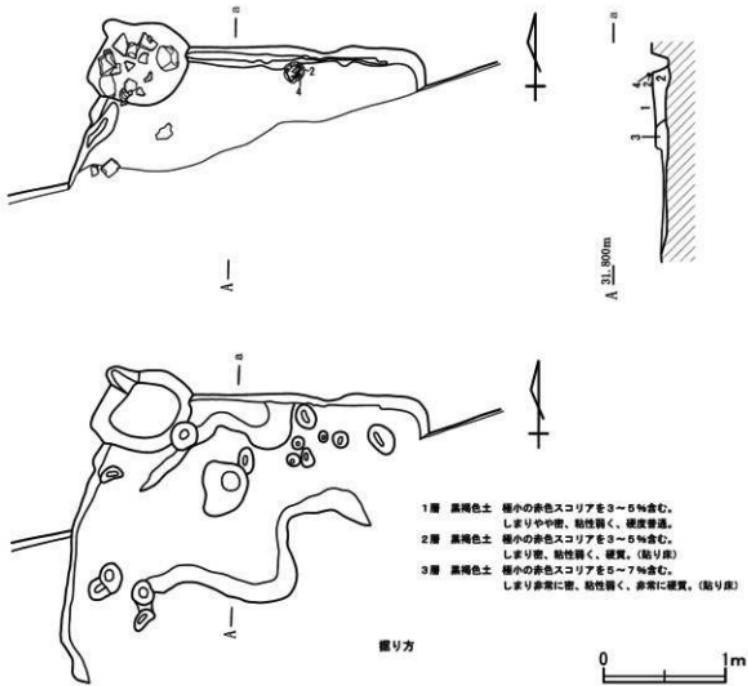
調査区西側に位置し、南側2/3はトレンチにより削平されている。規模は、東西2.8m、確認南北1.12m（掘り方で2.36m）で、深さは2～4cm、北・西壁際には幅8～16cm、床面からの深さ5～11cmの周溝が認められた。床面は貼り床では平坦である。柱穴等は認められなかった。主軸方向はN-2°-Wである。

カマドは北西隅に壁を掘り込み、礫・瓦等を使用して施設されていた。壁外への掘り込みは、幅84cm、奥行き53cmの凸形である。袖等は確認されなかったが、構築材には瓦が使用され、左右の袖の心材として15cm大の切り出しロームが用いられていた。主軸方向はN-31°-Wである。

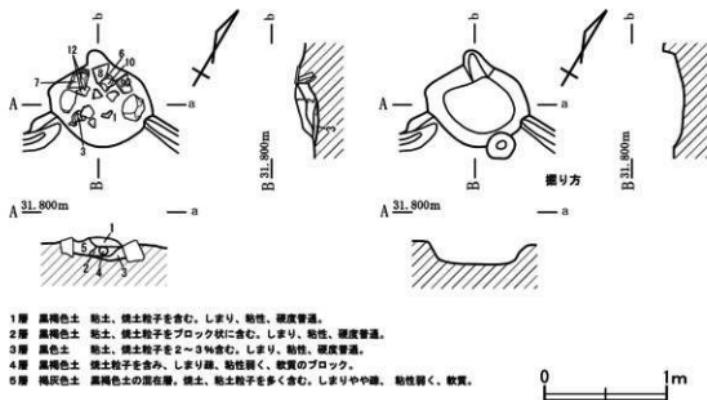
掘り方は、北壁からカマド前面付近がやや掘り窪められているほか、径10～40cmのピット状の掘り込みが認められた。

覆土は、黒褐色土主体で赤色・黒色スコリアを含むものである。

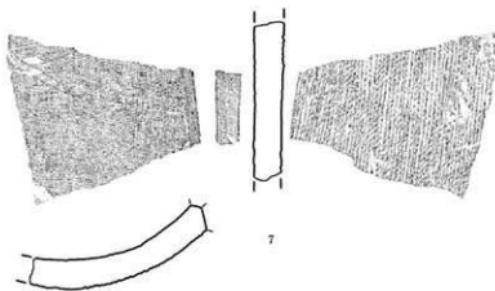
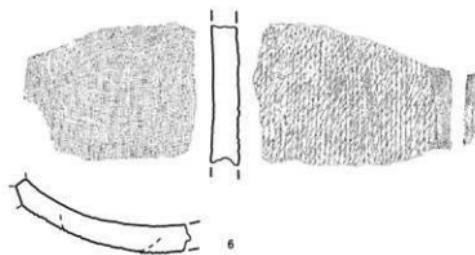
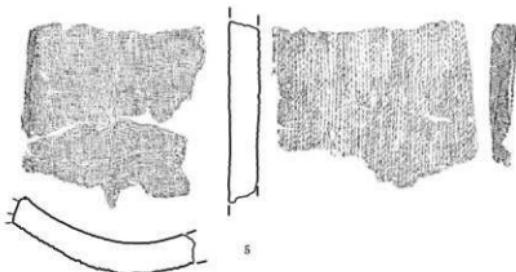
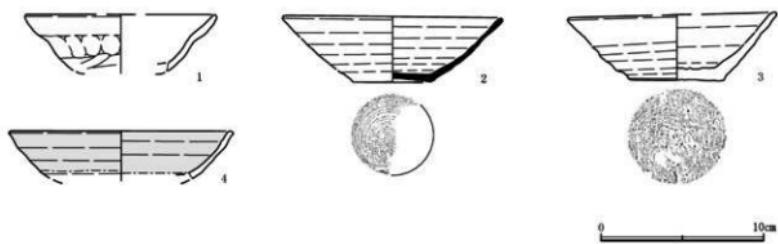
掘り方では、土坑状・ピット状の掘り込みが認められ、黒褐色土・暗褐色土等で埋め戻されていた。



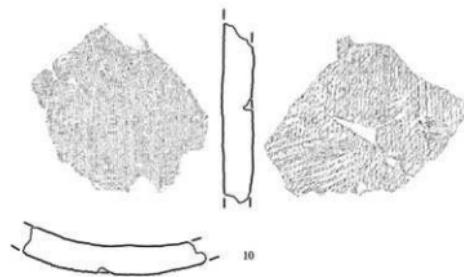
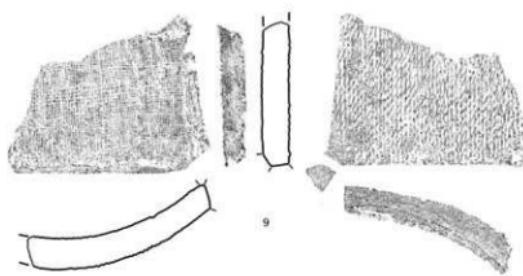
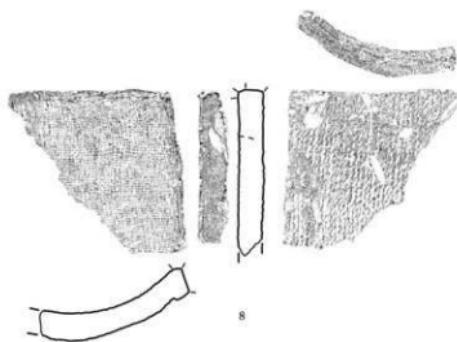
第24図 2号竖穴建物跡平面図・断面図 [S=1/40]



第25図 2号竖穴建物跡カマド平面図・断面図 [S=1/40]

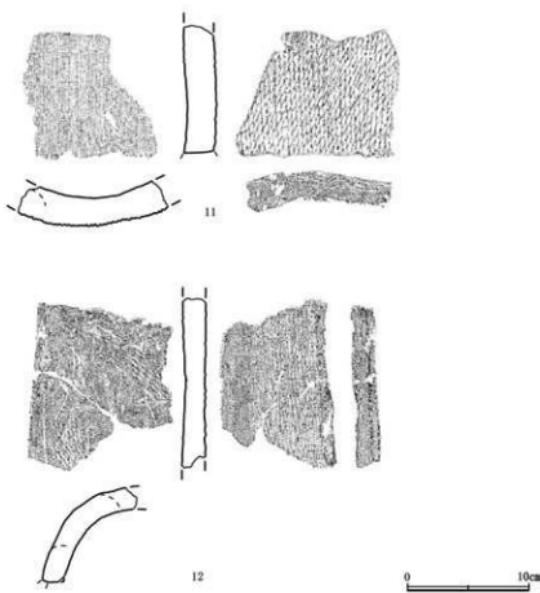


第26図 2号竖穴建物跡出土遺物 (1) [S=1/3・1/4]



0 10cm

第27図 2号竖穴建筑物跡出土遺物（2） [S=1/4]



第28図 2号竖穴建物跡出土遺物 (3) [S=1/4]

第7表 2号竖穴建物出土遺物観察表

() 内数値は口径・底径が復元径、器高は現存高 単位cm、重量g

1	土師器 环	法量 口径(11.6) 器高(2.9) 現存率 1/4以下 調整 外面：口縁部ヨコナギ、体部上半指剥痕、下半ヨコケズリ 内面：ヨコナギ 脱土 粗砂粒少ない 燃成 良好 色調：灰褐色 内：にぶい黄褐色・黒褐色 出土位置 カマド No.1 備考 相模型
2	須恵器 环	法量 口径(12.6) 器高3.7 底径(7.6) 現存率 1/4以下 調整 ロクロア形 成底部糸切り痕 脱土 粗砂粒・白色粒 焼成 良好 色調：灰色 出土位置 カマド No.2 備考
3	ロクロ土師器 环	法量 口径(13.0) 器高4.2 底径6.0 現存率 2/3 調整 ロクロア形 成底部糸切り痕。 脱土 粗砂粒 燃成 普通 色調 にぶい黄褐色 出土位置 カマド No.4 備考 内外面ともに剥離激しい。
4	灰釉陶器 塊	法量 口径(13.8) 器高(2.9) 現存率 1/4以下 調整 ロクロア形 外面：下端を除き全面施釉 内面：全面施釉 脱土 粗砂粒 形成 普通 色調：灰白色 脱土 粗砂粒・白色粒 燃成 普通 全体に剥離が溶けきっていない。
5	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 四面：布目板。側端部面取り 凸面：繩目叩き具痕 脱土 粗砂粒・白色粒 燃成 普通 色調 にぶい黄褐色 出土位置 カマド 重畠 759.2g 備考 側端面面取り、一部2面面取り。瓦尾根瓦窓系
6	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 四面：布目板。側端部面取り 凸面：繩目叩き具痕 脱土 粗砂粒 燃成 普通 四面： 黄褐色 凸面：黄褐色・灰白色 出土位置 カマド No.18 重量 539.3g 備考 側端面面取り。瓦尾根瓦窓系
7	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 四面：布目板、中央付近ナゲ痕。側端部面取り 凸面：繩目叩き具痕 脱土 粗砂粒・白色粒 焼成 良好 色調 灰褐色 出土位置 カマド No.16 重量 634.1g 備考 側端面面取り。四面に「X」状のナゲ痕。瓦 尾根瓦窓系
8	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 四面：布目板。側・扶端部面取り 凸面：繩目叩き具痕 脱土 粗砂粒 燃成 普通 色調 四面 に：明黄褐色 四面：明黄褐色 出土位置 カマド No.8 重量 585.1g 備考 鋼・広端面面取り。兩切り。瓦尾根瓦窓系
9	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 四面：布目板 凸面：繩目叩き具痕後平行叩き具による成型 脱土 粗砂粒 燃成 普通 色調 四面： 灰褐色 凸面：灰褐色 出土位置 カマド No.10 重量 644.5g 備考 乗越瓦窓系
10	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 四面：布目板 凸面：繩目叩き具痕 脱土 粗砂粒・砂っぽい 燃成 普通 色調 四面： 灰褐色 凸面：灰褐色 出土位置 カマド No.9 重量 529.5g 備考 乘越瓦窓系
11	瓦 平瓦	現存率 1/4以下 調整 四面：布目板 凸面：繩目叩き具痕 脱土 粗砂粒・白色粒・砂っぽい 燃成 普通 色調 灰 褐色 出土位置 カマド 広端面面取り。乘越瓦窓系
12	瓦 丸瓦	現存率 1/4以下 調整 凸面：繩目叩き具痕一部ナゲ削し 側端部面取り 四面：布目板。一部ナゲ。側端部面取り 脱土 粗砂粒 燃成 普通 色調 凸面：明褐色・にぶい黄褐色 四面：にぶい黄褐色 出土位置 カマド No.14・15 重量 409.5g 備考 側端面2面面取り。瓦尾根瓦窓系

出土遺物

遺物は、南側の大半が削平されていることから遺存状況は良くないが、カマド内からは瓦、北壁際中央付近の床面上約15cmからは灰釉陶器塊（4）と須恵器坏（2）が伏せて重なった状況で出土した。なお、上部に重ねられた灰釉陶器塊は完形であったと考えられるが、調査の段階で底部が欠損してしまったと思われる。また覆土中から土師器・須恵器・ロクロ土師器・瓦等が出土し、内訳は土師器坏3点、甕18点、須恵器坏20点、ロクロ土師器1点、灰釉陶器1点、平瓦19点、丸瓦5点の計67点で、重量は12,699.2gである。

1は土師器、2は須恵器、3はロクロ土師器、4は灰釉陶器、5～12は瓦で、1～3は坏、4は塊、5～11は平瓦、12は丸瓦である。1は体部外面に指頭痕を残す相模型である。2・3はロクロ成形で、底部に糸切り痕を残す。4は内外面に施釉。5～11は凹面に布目痕、凸面に繩叩き具痕が見られ、10は凸面の一部に平行叩き具痕が見られる。5・7～9は凹面側端部に、6は凸面側端部に面取りが見られる。側端面は5で2面の面取り？が見られるほかは、1面と見られる。9は広端端部が隅切り。12は凸面が繩叩き具痕をナデ消し、凹面は布目痕を残し、側端部付近は一部ナデ痕が認められる。側端面は2面面取りと見られる。また、6・8・11・12では粘土紐接合痕が認められ、5～12の生産瓦窯は5～9・12が瓦尾根瓦窯系、10・11が乘越瓦窯系と考えられる。

灰釉陶器（4）はK90段階とみられるが、須恵器坏（2）が南多摩窯跡の御殿山5窯式と考えられることから10世紀前半頃と考えられる。

3号竪穴建物跡（第29・30図、第8表、写真図版9・14）

調査区中央付近に位置し、南側は調査区外に延び、西側で4号土坑と重複し切っている。確認規模は、東西2.36m、南北1.2mで、深さは確認面で39～44cm、土層断面で51cm、壁際には幅17～38cm、床面からの深さ1～4cmの周溝が認められる。床面は貼り床では平である。柱穴・カマド等は認められなかった。主軸方向はN-14°-Wである。覆土は、黒褐色土主体で赤色・黒色スコリアを含むものである。

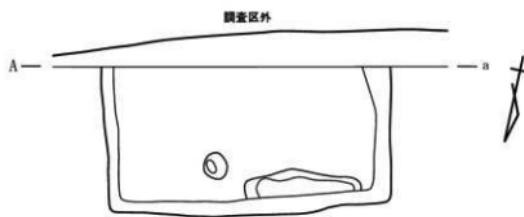
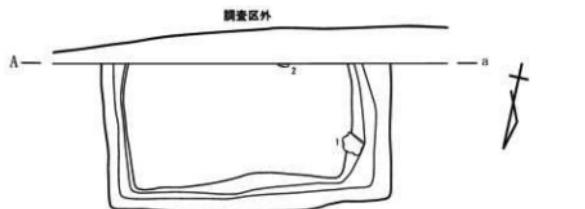
掘り方では、ピット状の掘り込みが認められ、黒褐色土で埋め戻されていた。

出土遺物

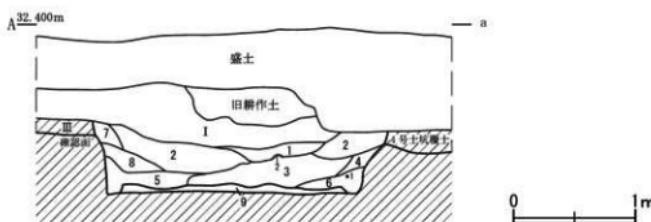
覆土中から土師器・須恵器・瓦が出土し、その内訳は土師器坏2点、甕17点、須恵器坏1点で、平瓦3点、丸瓦5点の計28点で、重量は3,530.5gである。

1・2は瓦で、1は平瓦、2は丸瓦である。1は凹面に布目痕、凸面に繩叩き具痕が残り、全体に焼き歪みが生じている。凹面の狭・側端部は面取り仕上げで、側端面は2面面取りで、沈線状の窪みが認められる。2は凸面が繩叩き具痕ナデ消し。凹面には布目痕が残り、端部は面取りが行われている。

時期は、出土遺物等から9～10世紀と考えられる。

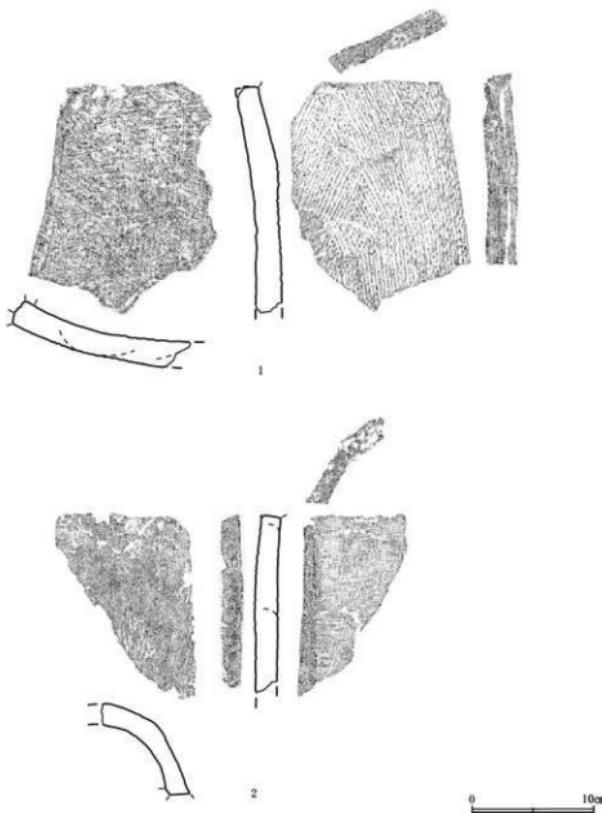


断面図



- I層 灰褐色土 極小の赤色スコリアを2~10%含む。しまりやや密、粘性弱く、やや硬質。
- 1層 黑褐色土 極小の赤色スコリアを2~3%、極小の黑色スコリアを2~3%含む。しまりやや硬、粘性非常に弱く、やや軟質。
- 2層 黑褐色土 極小の赤色スコリアを3~5%、小黒色スコリアを2~3%含む。しまりやや硬、粘性非常に弱く、やや軟質。
- 3層 黑褐色土 中ロームグロックを1~2%、小黒色スコリアを1%含む。しまりやや硬、粘性やや強く、やや軟質。
- 4層 黑褐色土 極小の赤色スコリアを3~5%含む。しまりやや密、粘性弱く、やや軟質。
- 5層 黑褐色土 極小の赤色スコリアを3~5%、小黒色スコリア2~3%含む。しまりやや硬、粘性やや強く、やや軟質。
- 6層 黑褐色土 小黒色スコリア2~3%、極小ローム粉子3~5%含む。しまりやや硬、粘性やや強く、やや軟質。
- 7層 黑褐色土 極小の赤色スコリア2~7%、極小の黑色スコリア1~2%含む。しまりやや硬、粘性やや強く、やや軟質。
- 8層 黑褐色土 極小の赤色スコリア2~3%、極小の黑色スコリア2~3%含む。しまりやや硬、粘性やや強く、やや軟質。
- 9層 黑褐色土 極小の赤色スコリア2~3%、極小の黑色スコリア3~5%含む。しまりやや密、粘性やや強く、やや硬質。(貼り底)

第29図 3号竖穴建物跡平面図・断面図 [S=1/40]



第30図 3号竖穴建物跡出土遺物 [S=1/4]

第8表 3号竖穴建物跡出土遺物観察表

()内数値は口径・底径が復元径、器高は現存高 単位cm、重量g

1	瓦 平瓦	現存率 1/4~2/3 調整 四面：布目痕。やや摩滅。側端部面取り 凸面：繩叩き 砂土 粗砂粒多い 焼成 不良 色調 暗灰色 出土位置 №3 重量 941.1g 備考 全体に焼き歪みが生じている。粘土接合痕あり。側端面2面、 狹端面面取り。乗越瓦窓系
2	瓦 丸瓦	現存率 1/4以下 調整 凸面：繩叩きナテ消し 四面：布目痕 砂土 粗砂粒 焼成 普通 色調 凸面：灰白色・褐 灰色 四面：灰白色 出土位置 №4 重量 305.7g 備考 狹・狹端面面取り。瓦尾根瓦窓系

2) 土 坑 (第31図、写真図版9)

1号土坑

調査区西側に位置し、上部はトレンチにより削平されている。北側で2号土坑と重複し、切っている。規模は長軸1.32m、短軸1.30m、深さ14cmで、平面形は円形である。断面形は浅い逆台形状で、底面はほぼ平らである。覆土は、黒褐色土の単層で赤色スコリアを含むものである。遺物は、覆土中から土師器・瓦が出土し、その内訳は土師器壺2点、同甕6点、平瓦1点、丸瓦1点の計10点で、重量は111.1gである。すべて小片のため図化し得る遺物はなかった。

2号土坑

調査区西側に位置し、南側はトレンチにより上部が削平されている。3号土坑を切り1号土坑に切られている。規模は長軸1.30m、残存短軸1.0m、深さ29cmで、平面形は不整円形である。断面形は浅い逆台形状で、底面はほぼ平らである。覆土は、黒褐色土の単層で赤色スコリアを含むものである。遺物は、覆土中から土師器・須恵器・瓦・礫が出土し、その内訳は土師器壺2点、同甕13点、須恵器壺2点、同甕2点、丸瓦1点の計20点で、総重量は147.7gである。すべて小片のため図化し得る遺物はなかった。

3号土坑

調査区西側に位置し、南側で2号土坑と重複し切られている。規模は長軸1.64m、短軸1.12m、深さ15cmで、平面形は梢円形である。断面形は浅い逆台形状で、底面はほぼ平らである。主軸方向はN-53°-Eである。覆土は、黒褐色土の単層で赤色スコリアを含むものである。遺物は出土しなかった。

4号土坑

調査区中央やや西側に位置し、東側で3号竪穴建物跡と重複し切られ、南側は調査区外に延びている。規模は確認長軸2.26m、短軸0.89m、深さは確認面で6~13cm、土層断面で23cm、平面形は長梢円形である。断面形は浅い逆台形状で、底面はほぼ平らである。主軸方向はN-6°-Eである。覆土は、黒褐色土の単層で赤色スコリアを含むものである。遺物は、覆土中から土師器・須恵器が出土し、その内訳は土師器甕5点、須恵器甕1点の計6点で、総重量は49.2gである。すべて小片のため図化し得る遺物はなかった。

5号土坑

調査区南東付近に位置し、南側は調査外に延びている。規模は確認長軸1.22m、短軸0.78m、深さは南側で36cm、北側で10cmである。平面形は不整梢円形で、断面形は上端が大きく開いたU字状で、底面には凹凸が見られるほか、南から北に向かって緩い段状に高くなっている。主軸方向はN-0°である。覆土は、黒褐色土の単層で黒色・赤色スコリアを含むものである。遺物は、出土しなかった。

3) ピット群 (第14図、第9表)

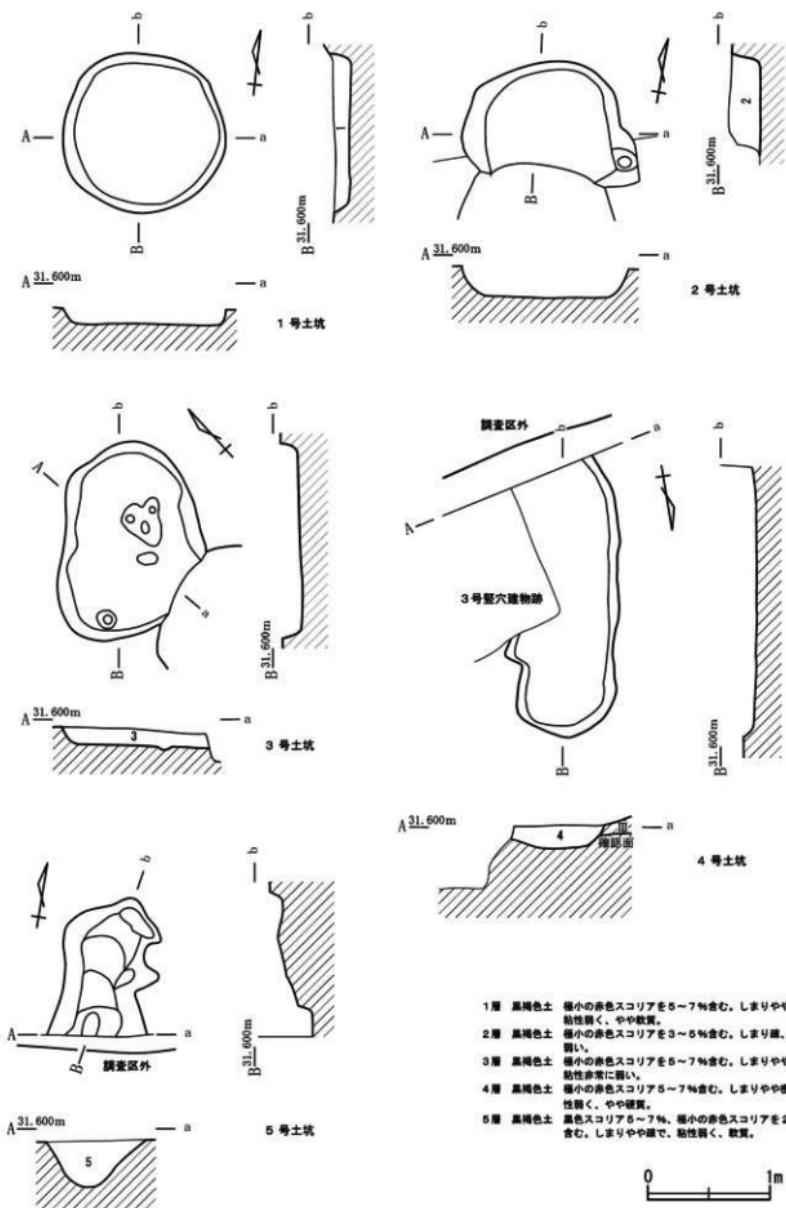
調査区中央部に位置し、北西—南東方向に延びている。

確認されたピットの数は13基、軸長約25~45cm、深さは約40cmのものが大半で、深いもので63cmを測る。遺物の出土はなく、時期は不明である。

第9表 B区ピット計測表

単位: cm

遺構番号	平面形態	長軸	短軸	深さ
P 1	円形	27	25	39
P 2	長方形	46	27	23
P 3	不整形	30	25	20
P 4	楕円形	40	30	43
P 5	不整形	35	30	27
P 6	不整形	37	35	37
P 7	円形	32	28	22
P 8	楕円形	35	32	13
P 9	円形	30	27	26
P 10	楕円形	45	(31)	11
P 11	長方形	44	32	63
P 12	円形	35	31	42
P 13	方形	30	30	24



第31図 1~5号土坑平面図・断面図 [S=1/40]

第4章 自然科学分析

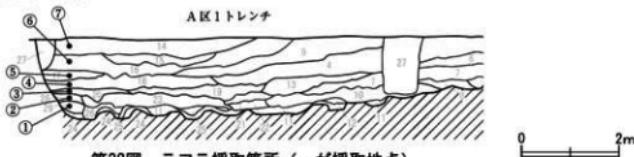
海老名市 逆川跡、国分宿遺跡A区第1トレンチのテフラ分析

上本進二（神奈川災害考古学研究所）

本遺跡は富士山の山頂火口の真東よりも9°北、距離は約62km 東にあって、等距離の遺跡に比べて富士系テフラが最も厚く堆積する角度にある。試料を採取したA区第1トレンチの北東端のテフラ層は、水成堆積の最下層および一次堆積の富士系スコリアと二次堆積のテフラ主体の堆積物より構成されている。土層は考古学的分層によって8層に分層されているが、最下層の硬化層を除く7層より試料を採取した。試料番号は下位より①～⑦である。

テフラ分析のための試料は、試料を腐植物と風化物質が完全に無くなるまで洗浄し、自然乾燥させ、20～40倍の実体顕微鏡で観察し、写真撮影した。この時、分析対象は非円磨で未風化のスコリア・溶岩片・軽石（ガラスを含む）に限定した。観察結果から、富士系スコリアや岩片の諸特徴、挟在する他の火山の軽石質火山灰や火山ガラス片を根拠にしたテフラ層序的区分（上杉2003；上本・上杉1996・2010）に基づいて同定をおこなった。分析結果の記載は、一次堆積のテフラがある場合はそのテフラNaや特徴と推定降下年代を記載した。

テフラ分析結果を表10に示した。試料①～③が延暦スコリアの二次堆積、試料⑤が貞觀スコリアの純層堆積である。試料⑦は延暦・貞觀スコリアの二次堆積で、11世紀後半のテフラ（S-24-9）も含んでいる。



第32図 テフラ採取箇所（・が採取地点）

第10表 テフラ分析結果

試料No	テフラの構成物質と特徴	テフラ番号	推定降下年代
①	斜長石付スコリア多量 風化カンラン石多量 破砕スコリア片 (二次堆積ローム起源) トゲトゲ長柱状気孔黒色（アメ色風化）スコリア 斜長石付スコリア赤色溶岩片	S-24-7 (写真1)	西暦800年 延暦スコリア
②	風化カンラン石多量 (二次堆積ローム起源) トゲトゲ長柱状気孔黒色（アメ色風化）スコリア 9mm 球形気孔球形スコリア 斜長石付溶岩片	S-24-7	西暦800年 延暦スコリア
③	風化カンラン石・石英多量 (二次堆積ローム起源) トゲトゲ長柱状気孔黒色（アメ色風化）スコリア5mm 斜長石付溶岩片 カンラン石付球形スコリア	S-24-7	西暦800年 延暦スコリア
④	風化カンラン石 7mm 黒色球形スコリア 赤色溶岩片 斜長石付溶岩片 カンラン石付球形スコリア	S-24-7-8	西暦800～864
⑤	黒色球形気孔スコリア 斜長石付溶岩片 カンラン石付球形スコリア	S-24-8 (写真2) (写真3)	西暦864年 貞觀スコリア
⑥	黒色（アメ色風化）球形気孔スコリア 斜長石多量 カンラン石付球形スコリア 自形斜長石	S-24-8 2次堆積	西暦864年以後
⑦	スコリア少ない トゲトゲスコリア S-24-7・8の2次堆積スコリアを含む 黒色球形気孔スコリア 赤色溶岩片多量 カンラン石	S-24-9 (写真4)	西暦1083年？

引用文献

- 上杉 陽 (2003) 『地学見学案内書 富士山』.117p.日本地質学会関東支部発行
上本進二・上杉 陽 (1996) 神奈川県のテフラ層と遺跡層序－考古学のためのY-Na・S-Na-分層マニュアル. 関東の四紀20,p3-24.
上本進二・上杉 陽 (2010) 神奈川県のテフラ層と遺跡層序－考古学のためのY-Na・S-Na-分層マニュアル II. 関東の四紀30,p3-26.



写真1 試料① S-24-7 延磨スコリア

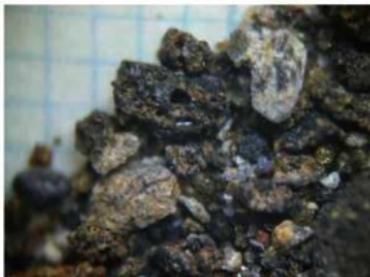


写真2 試料⑤ S-24-8 貞觀スコリア



写真3 試料⑤ S-24-8 貞觀スコリア 接写

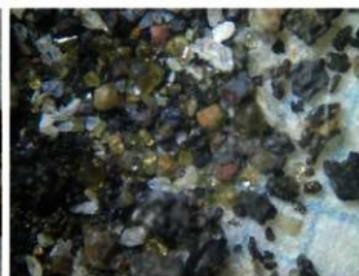


写真4 試料⑦ S-24-9

第33図 テフラの顕微鏡等写真(写真のメッシュは1mm)

第5章 まとめ

相模国分寺関連遺跡第12次調査では、逆川関連遺構、竪穴建物跡3棟、土坑5基、ピット群を確認した。今回の調査において注目されるのは、A区で確認された逆川関連遺構である。

逆川跡は、目久尻川から分岐して南流し、伊勢山の南側において、逆方向である北方向へ流れを変えていることからこの名が付き、相模国分寺の建立を考える上で重要な遺跡とされ、大正時代から注目を集めてきた。昭和24（1949）年に國學院大學の樋口清之氏により相模国分寺跡の北側で発掘調査が行われ、「舟つき場」とされる遺構等の発見が「『さかさ川』の謎」（樋口1963）で報告されたが、断片的な情報と概念図のみしか示されていない。

今回の調査は事業計画にあわせ影響範囲のみ調査対象とし、遺構の深い部分については現地保存としたが、一部トレンチを設定し遺構の把握に努めた。調査地点付近の逆川は、暗渠化し東側の市道下にあるが、古代の逆川流路もほぼ同じであると推測される。逆川関連遺構はこの逆川流路から西側に張り出すように確認され、A区の2/3が黒褐色の遺構覆土となっていた。遺構を完掘していないため、その形状等については明瞭ではないが、調査状況から復元を試みたい。

まず第1トレンチでは、東側に深く落ち込み、関東ローム層が畝状に掘り込まれている状況が確認された。これは、古代の駅路などの道路状遺構にみられるいわゆる波板状の凹凸に類似している。凹部分には瓦や土器細片、礫、獸骨片が出土、直上の土層は非常に硬質である状況が確認された。この凹凸面の主軸は第1トレンチよりやや南に振れ、第2トレンチ方向から続くものと推測される。幅数メートルの逆川跡流路側に向かう道路状遺構の様相を呈する。確認面からの深さは、第1トレンチ東端最深部で約1.9mを測り、東側に下る坂道状となっている。また、第1トレンチ西端から5mほど西にも階段状の掘り込みが確認されている。逆川流路側からこの階段状の掘り込みをたどると、同一の主軸で硬化面が認められ、同様に道路状を呈する。なお、第1トレンチの土層にはシルト状の堆積や鉄分を含む層もみられず、調査地点に滞水の痕跡は認められない。逆川の水面はより低いレベルにあったことを示すものであろう。

これまで、本遺構については、昭和24年樋口氏の発掘調査により階段状の遺構、舟着き場とされる遺構が発見されていたことから、同様の遺構として「船着場跡」の可能性を考えてきた。しかしながら、12次調査で確認された遺構は、その位置関係から逆川跡と深い関連が考えられるものの、船着場跡と断定することは難しく、逆川流路と台地の間を結ぶような、平行する2条の道状の遺構として想定し、逆川関連遺構とした（第33図）。樋口氏の調査地点は12次調査地点より南側であり、このような逆川関連遺構は他にも存在するかもしれない。

本遺構については一部分を調査したに過ぎず、出土した土器細片、瓦片から構築年代を特定することは難しい。しかしながら覆土中から出土した瓦片は乗越瓦窯系が約2割、その他ほとんどが瓦尾根瓦窯系のものとなっている。小破片で、波板状凹凸面上から出土したものである。一方第1トレンチ南壁覆土から採取した土壤の火山灰分析では、覆土下層から延暦年間に比定されるテフラが確認されており、中層から上層で貞觀年間に比定されるテフラが確認されている。のことから、本遺構は西暦800年頃には既に使用されなくなり、急速

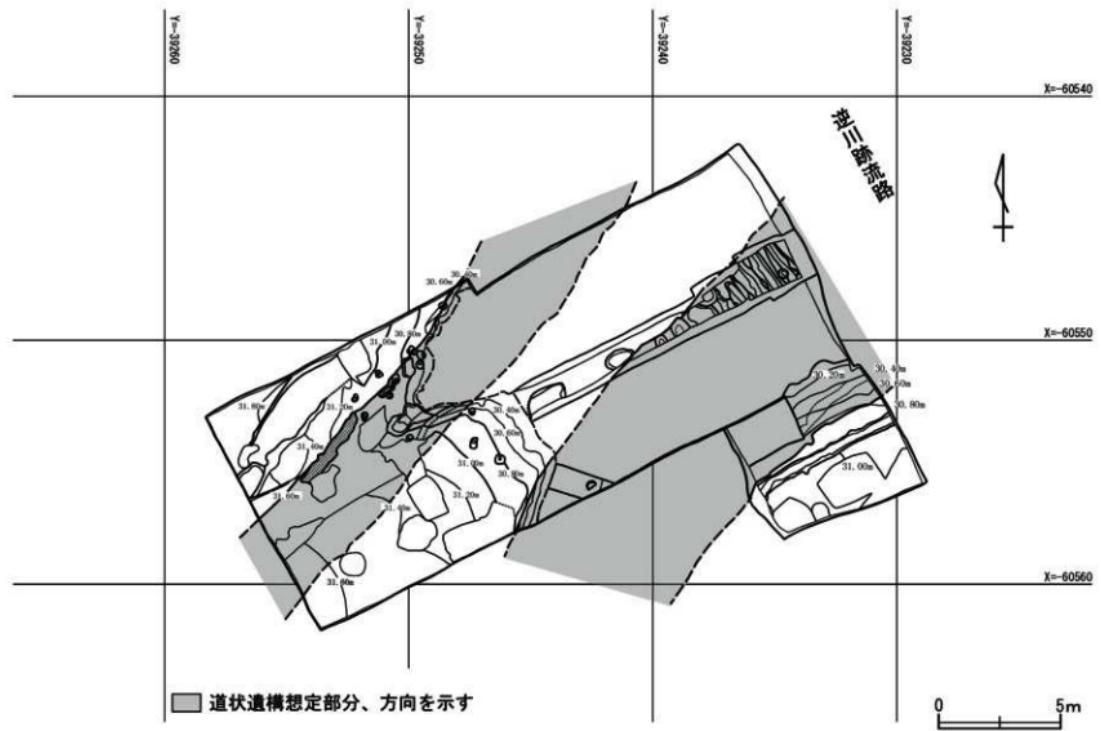
に埋まっていったことが想定される。

B区で確認された竪穴建物跡について1、2号建物跡は出土した土師器、須恵器、瓦などから9世紀第4四半期以降の所産であり、逆川関連遺構埋没後のものと判断される。1号建物跡は北壁中央にカマドが作られている一方、2号竪穴建物は北西コーナー隅にカマドが作られており、出土した土師器、須恵器の形式からも2号竪穴建物跡のほうが後出の様相を示す。ともにカマドなどから瓦が出土しており、特に1号竪穴建物跡からは御殿山窯産の瓦が多く出土している点が注目される。竪穴建物が営まれた時期は元慶2(878)年の震災により相模国分寺が被災した後とみられ、相模国分寺周辺の土地利用状況を考える上で重要な成果と言える。

以上、国分寺関連12次調査の調査成果を概観した。

逆川跡は明治時代の末頃までは相当の水量もあり、用水として利用されていたが、1940年に相模川左岸用水の完成により廃止され、1970年頃には大部分が暗渠化して住宅や道路となり、現在はその面影をほとんど残していない。このような状況から近世以前の逆川跡については正確な流路について不明な点が多いが、近年は流路等の再検討も行われるようになってきている（岡本2016）。

本調査について、報告書刊行まで時間が経過してしまったが、逆川の景観が変わっていく中で、調査を行い、その歴史や変遷を伝えていく意義は大きいと考える。



第33図 逆川関連遺構（道状遺構）想定図

引用・参考文献

- 相川 薫 2000 「国分尼寺北方遺跡－第23次調査－発掘調査報告書」 国分尼寺北方遺跡調査団
- 相原俊夫・河合英夫ほか 2003 「大谷市場遺跡発掘調査報告書」 玉川文化財研究所
- 浅賀貴広 2011 「本郷中谷津遺跡 第16次調査」 稲整古堂
- 阿部友寿ほか 2014 「河原口坊中遺跡 第4次調査」 かながわ考古学財団調査報告300（公財）かながわ考古学財団
- 池田 治・宮井 香ほか 2015 「河原口坊中遺跡 第2次調査」 かながわ考古学財団調査報告307（公財）かながわ考古学財団
- 市川正史 2012 「国分尼寺北方遺跡発掘調査報告書－第37次調査－」 稲アーケ・フィールドワークシステム
- 市川正史・渡辺 務ほか 2014 「河原口坊中遺跡第6次調査」 神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書24 稲アーケ・フィールドワークシステム
- 伊東秀吉・合田芳正ほか 1987 「海老名本郷（Ⅲ）」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
- 伊東秀吉・合田芳正ほか 1993 「海老名本郷（Ⅸ）」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
- 伊東秀吉・合田芳正ほか 1995 「海老名本郷（X）」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
- 伊東秀吉・碓井三子ほか 1998 「望地遺跡－第4次調査－」 国分尼寺北方遺跡－第12次調査－発掘調査報告書 望地遺跡発掘調査団・国分尼寺北方遺跡調査団・海老名市遺跡調査会
- 伊東秀吉・大坪宣雄ほか 1996 「海老名本郷（XIV）」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
- 伊東秀吉・大坪宣雄ほか 1996 「国分尼寺北方遺跡－第7次・第8次調査－」 住宅・都市整備公団・国分尼寺北方遺跡調査団
- 伊東秀吉・小林克利ほか 1994 「海老名本郷（XII）」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
- 伊東秀吉ほか 1994 「本郷中谷津遺跡埋蔵文化財調査報告書－第9次調査－」 海老名市 本郷中谷津遺跡調査団
- 稻生典太郎・合田芳正ほか 1991 「海老名本郷（VII）」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
- 江藤 昭・吉田 寿ほか 1989 「本郷中谷津遺跡」 本郷中谷津遺跡調査団
- 江藤 昭ほか 1984 「海老名望地遺跡」 海老名市望地遺跡調査団
- 海老名市 1998 「海老名市史1資料編 原始・古代」
- 海老名市教育センター 1988 「海老名、その大地の生い立ち」
- 海老名市史原始古代班 1998 「海老名市西部の遺跡分布調査」「えびなの歴史 海老名市史研究」第10号 海老名市史編纂室
- 大川 清・河野一也ほか 1992 「杉久保遺跡I」 日本窯業史研究所報告第42冊 稲日本窯業史研究所会
- 大坪宣雄・小林克利 2012 「国分尼寺北方遺跡（第38次調査）」 生活協同組合コープかながわ（有）吾妻考古学研究所
- 大谷真鶴遺跡調査団 2003 「大谷真鶴遺跡第3次調査」 海老名市教育委員会
- 岡本孝之 2016 「逆川の再検討－その変遷と調査研究のあゆみ－」『神奈川考古』第52号 神奈川考古同人会
- 押方みはる 1997 「藪草塚古墳－上浜田古墳群第7号墳－発掘調査報告書」 海老名市教育委員会
- 押方みはる 2002 「No.217 相模国分寺関連遺跡第14次（No.53）」『神奈川県埋蔵文化財調査報告44』神奈川県教育委員会
- 押方みはる・杉山和徳ほか 2017 「上浜田古墳群第2号墳発掘調査報告書」 海老名市教育委員会
- 押方みはるほか 2019 「杉久保宮ノ前遺跡発掘調査報告書」 海老名市教育委員会
- 香川敏一 1997 「大谷下浜田遺跡」 大谷下浜田遺跡発掘調査団
- 加藤久美ほか 2014 「河原口坊中遺跡 第1次調査」 かながわ考古学財団調査報告304（公財）かながわ考古学財団
- 神奈川県教育委員会 1988 「No.187・188 相模国分寺遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告30』

33. 神奈川県教育委員会 1990 「史跡相模国分寺No 1」「神奈川県埋蔵文化財調査報告 32」
34. 神奈川県教育委員会 2006 「No 192 相模国分寺関連遺跡 (No 53)」「神奈川県埋蔵文化財調査報告 49」
35. 神奈川県教育委員会 2009 「No 234 相模国分寺関連遺跡 (No 53)」「神奈川県埋蔵文化財調査報告 54」
36. 神奈川県座間高等学校郷土研究クラブ 1998 「海老名市埋蔵文化財調査報告 II」
37. 香村紘一 1998 「国分尼寺北方遺跡 第14次調査」 国分尼寺北方遺跡第14次調査団
38. 香村紘一 2006 「国分尼寺北方遺跡 第19次調査 第24次調査」 相模原考古学研究会
39. 河野喜映 1998 「国分尼寺北方遺跡 第17・18次調査」かながわ考古学財団調査報告 61 (財)かながわ考古学団
40. 北原實徳 1999 「国分尼寺北方遺跡 - 第20次調査 -」 国分尼寺北方遺跡第20次調査団
41. 北平朗久・中山 豊 2000 「海老名市No 69 遺跡発掘調査報告書」 海老名市No 69 遺跡発掘調査団
42. 國平健三・市川正史ほか 1988 「宮久保遺跡II」 神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 15 神奈川県立埋蔵文化財センター
43. 國平健三・岡本孝之ほか 1979 「上浜田遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告 15 神奈川県教育委員会
44. 國平健三・長岡文紀ほか 1987 「宮久保遺跡I」 神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 15 神奈川県立埋蔵文化財センター
45. 國平健三・長谷川厚ほか 1990 「宮久保遺跡III」 神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 15 神奈川県立埋蔵文化財センター
46. 久保哲三・後藤喜八郎ほか 1987 「海老名本郷(IV)」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
47. 久保哲三・後藤喜八郎ほか 1990 「海老名本郷(VI)」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
48. 久保哲三・星野達郎ほか 1988 「海老名本郷(V)」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
49. 久保哲三・星野達郎ほか 1989 「海老名本郷(VII)」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
50. 熊谷 満・斎木秀雄ほか 1998 「本郷中谷津池端遺跡」 海老名本郷中谷津池端遺跡調査団
51. 呉地英夫 2002 「大谷下浜田遺跡第12・13次調査発掘調査報告書」 大谷下浜田遺跡発掘調査団
52. 小出義治・柳谷 博ほか 1985 「海老名本郷(II)」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
53. 小出義治ほか 1985 「海老名本郷(I)」 富士ゼロックス株式会社 本郷遺跡調査団
54. 後藤喜八郎・小林克利ほか 1998 「海老名本郷(XV)」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
55. 小林克利・滝澤 寛ほか 1992 「海老名本郷」 富士ゼロックス株式会社 本郷遺跡 S K 地区調査
56. 小林克利・守屋照代ほか 1998 「海老名本郷(XVI)」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
57. 小林克利・守屋照代ほか 2000 「海老名本郷(XVII)」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
58. 小林晴生・石川真紀ほか 2007 「望地遺跡 第8次調査 発掘調査報告書」 紫玉川文化財研究所
59. 小山裕之・三ツ橋正夫 2002 「国分尼寺北方遺跡第25次調査発掘調査報告書」 玉川文化財研究所
60. 今野まりこ・押方みはる 2018 「望地遺跡第9次調査」 海老名市教育委員会
61. 斎木秀雄・熊谷 満 1992 「大谷真鯨遺跡第2次調査」 大谷真鯨遺跡調査団
62. 齋藤真一・高橋 香ほか 2011 「社家宇治山遺跡」 かながわ考古学財団調査報告 264 (公財)かながわ考古学財団
63. 堺 雅仁編 1991 「本郷池端中谷津遺跡」 本郷池端中谷津遺跡第7次・8次調査団
64. 追 和幸 2012 「大谷下浜田遺跡(海老名市No 69 遺跡)第14次調査発掘調査報告書」 紫玉川文化財研究所
65. 鈴木裕子・山崎貴子 2017 「国分尼寺北方遺跡 第51次調査」 海老名市 紫玉川神奈川営業所
66. 須田 誠 1993 「No 248・253 相模国分寺関連遺跡 (No 53)」「神奈川県埋蔵文化財調査報告 35」 神奈川県教育委員会
67. 須田 誠 1993 「相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書III」 海老名市教育委員会
68. 須田 誠 1994 「相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書IV」 海老名市教育委員会
69. 須田 誠 1994 「No 282 相模国分寺関連遺跡 (No 53)」「神奈川県埋蔵文化財調査報告 36」 神奈川県教育委員会
70. 須田 誠 1995 「No 294 相模国分寺関連遺跡 (No 53)」「神奈川県埋蔵文化財調査報告 37」 神奈川県教育委員会

71. 須田 誠 1996 「No 278 ~ 280 相模国分寺関連遺跡（第8 ~ 10次調査）（No 53）」「神奈川県埋蔵文化財調査報告38」 神奈川県教育委員会
72. 須田 誠 1997 「No 284 相模国分寺関連遺跡（第11次調査）（No 53）」「神奈川県埋蔵文化財調査報告39」 神奈川県教育委員会
73. 須田 誠 1998 「No 349 相模国分寺関連遺跡（No 1）」「神奈川県埋蔵文化財調査報告40」 神奈川県教育委員会
74. 須田 誠 2000 「No 216 相模国分寺関連遺跡・第11次（No 1・53・57）」「神奈川県埋蔵文化財調査報告42」 神奈川県教育委員会
75. 須田 誠・滝澤 光輝 1995 「相模国分寺関連遺跡3 - 相模国分寺城範囲確認調査 -」 海老名市教育委員会
76. 須田 誠・服部みはる 1993 「海老名市埋蔵文化財年報1 平成3年（1991）度版」 海老名市教育委員会
77. 須田 誠・向原 崇英 2012 「史跡相模国分寺 史跡相模国分寺跡環境整備事業に伴う発掘調査報告書 第1分冊（遺構編）」 海老名市教育委員会
78. 瀬田哲夫・押木弘己 2001 「No 88（有鹿）遺跡発掘調査報告書」 海老名市No 88 遺跡発掘調査団・衝縄倉遺跡調査会
79. 千田利明 2007 「大谷真鯨遺跡第4次調査」 (有)プラフマン
80. 千田利明 2007 「国分尼寺北方遺跡第31次調査」 (株)厚木地所 (有)プラフマン
81. 千田利明 2009 「本郷中谷津遺跡第17次調査」 海老名市消防本部 (有) プラフマン
82. 千田利明 2009 「国分南原西遺跡第2次調査」 (有)プラフマン
83. 千田利明 2009 「国分尼寺北方遺跡第36次調査」 (株)アーネストワン (有)プラフマン
84. 千田利明 2010 「河原口坊中遺跡第3次調査」 海老名市建設部下水道課 (有) プラフマン
85. 千田利明 2010 「大谷吉久保遺跡第2次調査」 (有)プラフマン
86. 千田利明 2012 「国分尼寺北方遺跡第42次調査」 タクトホーム㈱ (有)トモス企画 (有)プラフマン
87. 千田利明 2012 「神奈川県海老名市大谷坊原遺跡」 アオイ建設㈱ (有)プラフマン
88. 千田利明 2013 「国分尼寺北方遺跡第46次調査」 タクトホーム㈱ (有)プラフマン
89. 千田利明 2014 「本郷中谷津遺跡 第18次調査」 海老名市建設部道路整備課 (有)プラフマン
90. 千田利明 2016 「大谷下浜田遺跡第18次調査」 (株)グリーンハウジング (有)プラフマン
91. 千田利明・秋本幸司 2007 「国分尼寺北方遺跡第30次調査」 門倉木材㈱ (有)プラフマン
92. 千田利明・西野和廣 2008 「国分尼寺北方遺跡第33次調査」 三橋ビル(有) (有)プラフマン
93. 前場幸治 1980 「古瓦を追って 相模国分寺・千代台庵寺考」
94. 高杉博章 1998 「国分尼寺北方遺跡 第16次調査」 海老名市No 35 遺跡調査団
95. 千高杉博章 2014 「杉久保遺跡発掘調査報告書 第6次調査」 (株)アーク・フィールドワークシステム
96. 高杉博章・高橋 均 1992 「海老名市大谷真鯨遺跡」 大谷真鯨遺跡調査団
97. 滝澤 亮・小池 啓輝 2007 「本郷中谷津遺跡第14次調査」 (株)豊古堂
98. 滝澤 亮・滝澤友子ほか 1992 「大谷向原遺跡」 海老名市遺跡調査会
99. 滝澤 亮・林原利明 1990 「相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書I - 相模国分寺跡（推定中門・金堂跡）の調査 -」 海老名市教育委員会
100. 滝澤 亮・林原利明ほか 1990 「相模国分寺関連遺跡I - 尼寺跡の調査（1989 ~ 1990年度） -」 海老名市教育委員会
101. 滝澤 亮・林原利明ほか 1990 「相模国分寺関連遺跡II - 僧寺1次・2次調査 -」 海老名市教育委員会・相模国分寺遺跡調査会
102. 滝澤 亮・渡井英登ほか 1992 「相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書II - 相模国分尼寺跡（推定講堂・中門・經蔵跡）の調査 -」 海老名市教育委員会
103. 滝澤 亮・光輝 1993 「神奈川県海老名市中谷津遺跡 - 第8次調査 -」 本郷中谷津遺跡調査団
104. 滝澤 亮ほか 2000 「下の谷戸遺跡・宮台遺跡」 下の谷戸・宮台遺跡発掘調査団

105. 田村良照 2003 「No 248・249 相模国分寺関連遺跡第15・16次調査 (No 1・53)」『神奈川県埋蔵文化財調査報告45』 神奈川県教育委員会
106. 中村哲也 2002 「上浜田4号墳発掘調査報告書」 上浜田4号墳発掘調査団
107. 中山每吉・矢後勝吉 1924 「相模国分寺志」 海老名村
108. 西野和廣 2007 「国分尼寺北方遺跡第29次調査」 株エヌ・ティ・ティ・ドコモ ネットワーク本部 (有) ブラフマン
109. 服部みはる 1994 「No 290 相模国分寺関連遺跡 (第6次) (No 53)」『神奈川県埋蔵文化財調査報告36』 神奈川県教育委員会
110. 加林原利明 1989 「相模国分寺関連遺跡第1次発掘調査概報」 相武考古学研究所
111. 橋口清之 1963 「『さかさ川』の謎」「発掘」 学生社
112. 日野一郎・渡辺 熙ほか 1992 「相模国分寺」 相模国分寺遺跡調査団
113. 本郷中谷津遺跡調査団 1990 「神奈川県海老名市本郷中谷津遺跡第2次発掘調査報告書」
114. 丸子 亘 1983 「神奈川県海老名市本郷池端A遺跡発掘調査概報」 本郷池端A遺跡発掘調査団
115. 三ツ橋勝 2000 「国分尼寺北方遺跡・第22次発掘調査報告書」 海老名No 35 遺跡調査団
116. 横山太郎 2017 「国分尼寺北方遺跡第47次調査-発掘調査報告書-」 大和ハウス工業㈱ (有)吾妻考古学研究所
117. 横山太郎・長谷川静 2016 「大谷坊原遺跡第2次調査 発掘調査報告書」 (有)吾妻考古学研究所
118. 吉田章一郎・清水信行ほか 1995 「海老名本郷 (X I)」 富士ゼロックス㈱ 本郷遺跡調査団
119. 吉田政行・依田亮一ほか 2009 「杉久保内藤原遺跡・杉久保内藤原横穴墓群・杉久保釜坂遺跡」 かながわ考古学財団調査報告235 (財) かながわ考古学財団
120. 渡辺 務・吉岡秀範 2007 「国分尼寺北方遺跡-第27次・28次調査-」 日本窯業史研究所報告第69冊 (株)日本窯業史研究所
121. 渡辺清史・脇本博康ほか 2013 「河原口坊中遺跡第5次調査」 神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書14 国際文化財 (有)
122. 渡辺みすず 1992 「No 234 逆川跡 (No 37)」『神奈川県埋蔵文化財調査報告34』 神奈川県教育委員会

写 真 図 版



A区全景（北から）

写真図版1



昭和21(1946)年3月 米軍撮影 国土地理院蔵

1. 逆川跡流路図



1. A区全景(北東から)



2. A区全景(東から)

写真図版3



1. 逆川関連遺構（北から）



2. 逆川関連遺構第1トレンチ南側土層堆積状況



1. 逆川関連遺構遺物出土状況(北西から)



2. 逆川関連遺構遺物出土状況(北東から)



3. 逆川関連遺構(北東から)

写真図版5



1. 逆川関連遺構西側階段状部分・ピット群 (南東から)



2. 逆川関連遺構西側階段状部分と硬化面・ピット群 (南西から)



1. B区全景(西から)



2. 1号竪穴建物跡遺物出土状況(南から)

写真図版7



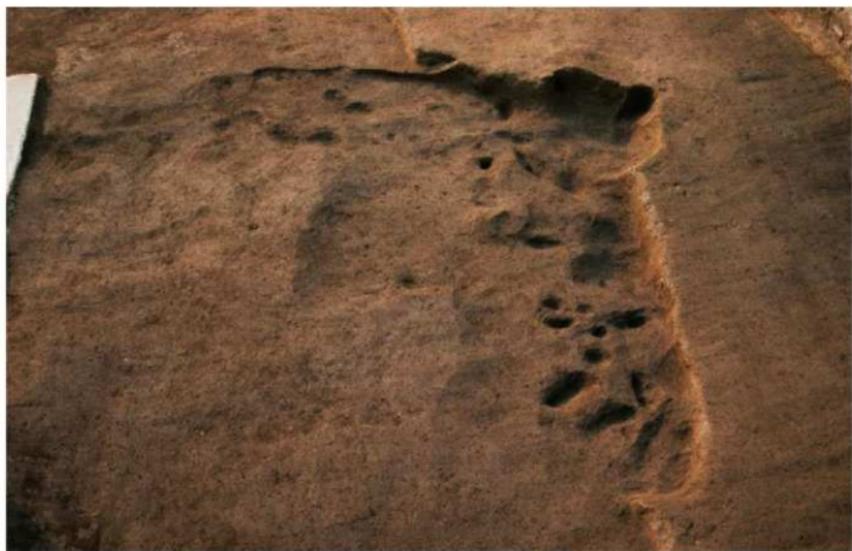
1. 1号竪穴建物跡カマド (南から)



2. 1号竪穴建物跡掘り方 (南から)



1. 2号竪穴建物跡遺物出土状況 (東から)



2. 2号竪穴建物跡掘り方 (東から)

写真図版9



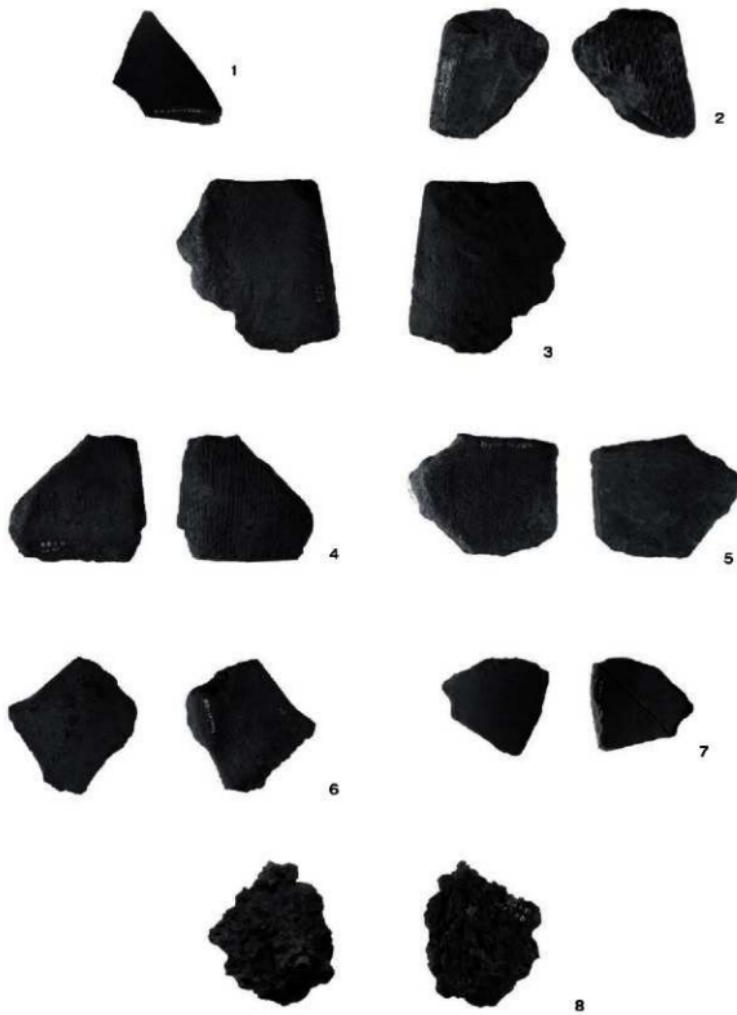
1. 3号竪穴建物跡 (北から)



2. 1~3号土坑 (西から)

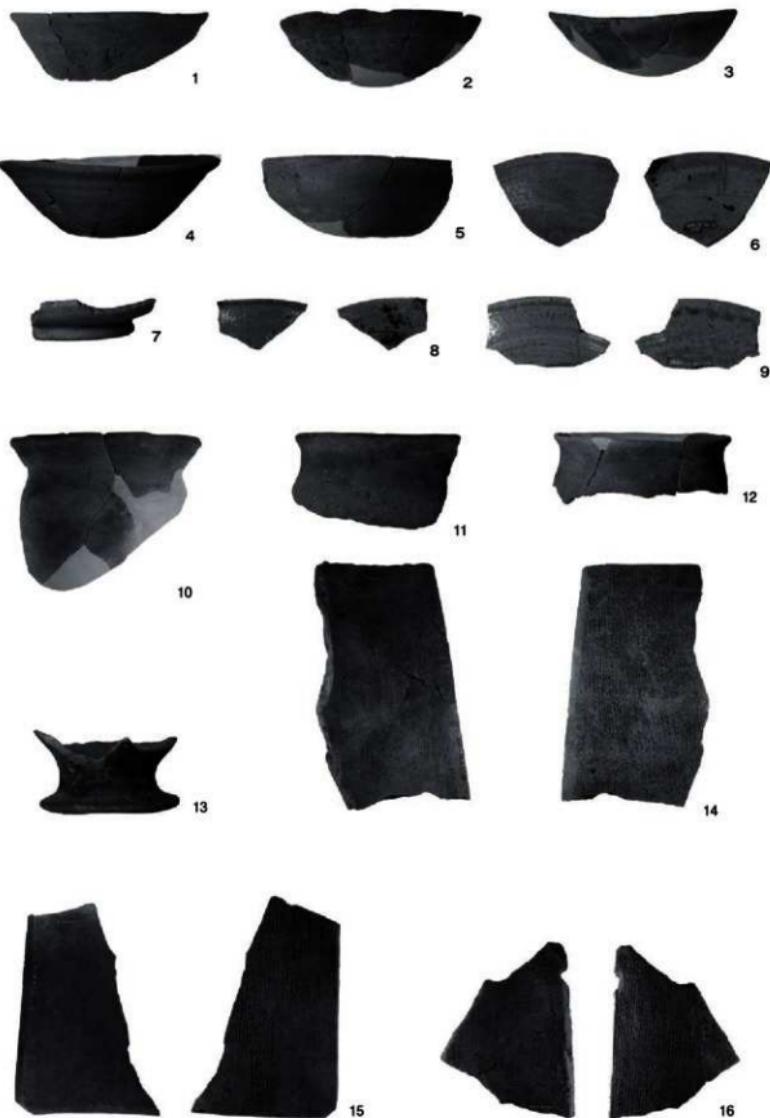


3. 4号土坑 (北東から)



1. 逆川開削遺構出土遺物

写真図版11



1. 1号竪穴建物跡出土遺物 (1)



17

18



19

20



21



22



23



23



24

1. 1号竪穴建物跡出土遺物 (2)

写真図版13



26



27

1. 1号竪穴建物跡出土遺物 (3)



1



2



3



4



5



6



7

2. 2号竪穴建物跡出土遺物 (1)

写真図版14



10

11

12



1. 2号竪穴建物跡出土遺物 (2)



1

2

2. 3号竪穴建物跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さかさがわあと、こくぶしゅくいせき（さがみこくぶんじかんれんいせきだい12じちょうさ）はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	逆川跡、国分宿遺跡（相模國分寺関連遺跡 第12次調査）発掘調査報告書							
編著者名	今野まりこ、押方みはる、吉岡秀範、上本進二							
編集機関	海老名市教育委員会							
所在地	〒243-0422 神奈川県海老名市中新田377 TEL046-235-4925							
発行年月日	2020年 3月 27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
さかさがわあと、こくぶしゅくいせき 相模國分寺関連遺跡 第12次調査	かねのけん 神奈川県 えびなし 海老名市 こくぶしゅくいせき 国分南一丁目 ひなん 1865番ほか	14215	37・53	35° 27° 23° 23°	139° 23° 54°	1995.11.07～ 1995.12.29	525	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
さかさがわあと 逆川跡	その他の遺跡 (運河・用水路跡)	奈良・平安時代	逆川跡関連遺構	土器類・須恵器・ロクロ土器・灰釉陶器・瓦・鉄滓	相模國分寺、相模國分尼寺造営に関連すると推測される 運河（逆川跡）に関連する道路状の遺構を確認した。			
こくぶしゅくいせき 国分宿遺跡	散布地・ 集落跡	奈良・平安時代	堅穴建物跡3、 土坑5、ピット群		堅穴建物跡のカマド2基では瓦を構築材に使用している。			
要約	相模國分寺関連遺跡第12次調査（逆川跡・国分宿遺跡）を実施した地点は、相模野台地西端の段丘面である中津原面に所在する。本遺跡は国指定史跡相模國分寺跡の周辺にあたる。A区では相模國分寺造営に関すると推測される逆川跡関連遺構、B区は平安時代の堅穴建物跡等が確認された。							

・本書は長期保存を考慮し、中性紙を使用しています。

【紙質】	表紙	レザック66
	見返し	上質紙
	例言・目次・本文	書籍用紙
	扉	書籍用紙・アート紙
	写真図版・奥付	アート紙

【印刷】写真図版以外は電算算用紙によるオフセット印刷
写真図版はカラー印刷、ダブルトーン印刷（主版黒色+副版グレー）

- ・文化財保護、教育普及、学術研究を目的とする場合は、著作権者の承諾なくこの報告書の一部を複製して利用できます。なお、利用にあたっては出展を明記してください。
- ・この報告書に係る記録面（写真類を含む）は、海老名市教育委員会で保管していますので、利用する場合は連絡の上、必要な手続きをとってください。

逆川跡、国分宿遺跡（相模國分寺関連遺跡第12次調査） 発掘調査報告書

発行日 令和2年3月27日
 編集 海老名市教育委員会
 発行 海老名市教育委員会教育部教育総務課文化財係
 神奈川県海老名市中新田377 TEL046-235-4925
 印刷 松代印刷株式会社